――千葉県市原市――

青　柳　塚　群

1990

市原市青柳土地区画整理組合
財団法人　市原市文化財センター

序　　文

「王賜」銘鉄剣の発見、上総国分尼寺の伽藍の解明、小銅鐸や銅釧の出土など、市原市は、往時の人々の残した貴重な文化遺産に恵まれ、様々な話題を提供してきております。西に東京湾を臨み、市の中央を貫流する養老川により形成された平野部、さらには台地・丘陵地帯と、自然の恵みには事欠かなかったことと思われます。このような良好な自然環境の下、先人達は様々な足跡を記してきました。それが、埋蔵文化財として今でも市内各所に残されております。本市が「埋蔵文化財の宝庫」と言われるゆえんであります。

一方、本市は首都圏のベッドタウンとして、またリゾート地としても注目されている所であります。特に、都内における、土地の高騰は、本市における宅地の供給を一層促すものとなってきております。国分寺台や千原台等の台地上の開発だけでなく、平野部の整備も急務となってきております。このような開発と文化財保護の調和をいかに図っていくかが、常に問われていることは言うまでもありません。

今回、調査を実施致しました青柳地区は、古代には「海上潟」と万葉集に詠われ、また江戸時代には、「アオヤギ」と称されております、バカガイの産地として、更に、明治時代以後は、海苔の養殖地として広く知られたところであります。本報告は、この青柳地区の区画整理事業に先行して、地区内に所在した「青柳塚群」の発掘調査の成果をまとめたものです。これまでほとんど調査のされなかった、海岸平野部の調査成果として貴重なものと言えます。特に際立った発見が認められなかったとはいえ、縄文時代から近世に至る時代の土器などが出土したことは、低地への活発な進出をうかがわせるものであり、注目に値するものといえます。本報告書が学術書としてだけでなく多方面の方々の文化財保護思想の涵養の一助となるよう活用されることを期待するものです。

最後に、調査にあたり様々な御協力をいただいた、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課市原市青柳土地区画整理組合、地元の方々に厚くお礼申し上げます。

平成元年8月31日

財団法人　市原市文化財センター
理事長　星　野　一　郎

例　　言

1　本書は千葉県市原市青柳地区の特定土地区画整理事業に先行して実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　本書に所収する内容は、千葉県市原市青柳字円馬戸2212地先に所在する青柳塚群についての報告書である。

3　発掘調査は、市原市青柳土地区画整理組合の委託を受け、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもと、財団法人市原市文化財センターが実施した。

4　調査対象は、塚11基であった。

5　発掘調査、整理作業は、下記の通りに行った。

　　発掘調査　　昭和63年10月15日～平成元年６月30日
　　担当　高　橋　康　男
　　整理作業　　平成元年７月１日～平成元年８月31日
　　担当　高　橋　康　男

6　本書の執筆、作成は高橋が行った。なお、１は市原市教育委員会社会教育部文化課に原稿をお願いした。

7　市原市文化財センター調査コードは、セ89である。

凡　　例

1　方位は座標北である。
2　遺構の全体図において、スクリーントーンの部分はトレンチの設定個所を示す。
3　挿図中の遺物については、断面を中心にして向かって右側に外面、左側に内面を置いてある。縮尺は、３分の１を原則とした。
4　遺物観察表中の法量の表記は、左から器高、口径、底径の順で表記してある。単位はcmである。また、色調については、「標準土色帖」を使用した。

市原市文化財センター組織表

昭和63年度(調査)

役　員

理事長	星野一郎	(市教育委員会教育長)
副理事長	大野義規	(市教育委員会社会教育部長)
常務理事	須田昇三	(専任)
理事	滝口宏	(早稲田大学名誉教授)
理事	寺村光晴	(和洋女子大学教授)
理事	海上信久	(姉崎神社宮司)
理事	根本正夫	(市企画部長)
理事	宮崎芳雄	(市総務部長)
理事	地引希壹	(市都市部長)
理事	安藤隆一	(市財政課長)
監事	元吉末喜	(市会計課長)
監事	河野徳三	(市教育委員会総務課長)

職　員

庶務課

課長	田丸萬富
主事補	大鐘光江
事務員(嘱託)	秋田晴美
事務員(嘱託)	石渡あゆみ

調査課

課長	石田広美
主幹	加藤正信
主任調査研究員	宮本敬一
主任調査研究員	田中清美
調査研究員	浅利幸一
調査研究員	大村直
調査研究員	近藤敏
調査研究員	高橋康男
調査研究員	田所真
調査研究員	木對和紀
調査研究員(嘱託)	田中新史
調査研究員(嘱託)	半田堅三
事務員(嘱託)	高浦貞子
事務員(嘱託)	田中裕子

平成元年度(調査・整理)

役　員

理事長	星野一郎	(市教育委員会教育長)
副理事長	大野義規	(市教育委員会社会教育部長)
常務理事	須田昇三	(専任)
理事	滝口宏	(早稲田大学名誉教授)
理事	寺村光晴	(和洋女子大学教授)
理事	海上信久	(姉崎神社宮司)
理事	根本正夫	(市企画部長)
理事	宮崎芳雄	(市総務部長)
理事	地引希壹	(市都市部長)
理事	安藤隆一	(市財政課長)
監事	佐久間章	(市会計課長)
監事	小宮仁	(市教育委員会総務課長)

職　員

庶務課

課長	田丸萬富
主事補	大鐘光江
事務員(嘱託)	秋田晴美
事務員(嘱託)	石渡あゆみ

調査課

課長	矢戸三男
係長	宮本敬一
主任調査研究員	田中清美
主任調査研究員	浅利幸一
調査研究員	大村直
調査研究員	近藤敏
調査研究員	木對和紀
調査研究員	高橋康男
調査研究員	忍澤成視
調査研究員	田中茂良
調査研究員(嘱託)	田中新史
調査研究員(嘱託)	半田堅三
事務員(嘱託)	高浦貞子

本文目次

序文
例言
凡例
市原市文化財センター組織表
1．調査に至る経過　1
2．遺跡の位置と環境　1
　1）地理的環境　1
　2）歴史的環境　1
3．調査の方法と成果の概要　3
　1）調査の方法　3
　2）成果の概要　3
4．遺構と遺物　6
　1）1号塚　6
　2）2号塚　7
　3）3号塚　10
　4）4号塚　13
　5）5号塚　15
　6）6号塚　17
　7）7号塚　20
　8）8号塚　22
　9）9号塚　26
　10）10号塚　31
　11）11号塚　37
　12）12号炭窯　38
まとめ　39

挿図目次

第1図　青柳塚群と周辺の遺跡　4
第2図　青柳塚群配置図　5
第3図　1号塚全体図　6
第4図　1号塚トレンチ東壁実測図　7
第5図　2号塚全体図　7
第6図　2号塚第1トレンチ南東壁実測図　8
第7図　2号塚第3トレンチ南東壁実測図　8
第8図　2号塚第4トレンチ北東壁実測図　8
第9図　2号塚第2トレンチ北東壁実測図　8
第10図　2号塚第2トレンチ人骨、銭出土状況模式図　9
第11図　2号塚出土銭拓影図　9
第12図　2号塚出土遺物　10
第13図　3号塚全体図　11
第14図　3号塚第4トレンチ西壁実測図　11
第15図　3号塚出土遺物　11
第16図　3号塚出土銭拓影図　13
第17図　4号塚全体図　13
第18図　4号塚第1トレンチ西壁実測図　14
第19図　4号塚第3トレンチ北壁実測図　14
第20図　4号塚第2トレンチ南壁実測図　14
第21図　4号塚出土遺物　14
第22図　5号塚全体図　15
第23図　5号塚トレンチ西壁実測図　16
第24図　5号塚出土遺物　16
第25図　6号塚全体図　18
第26図　6号塚第1トレンチ西壁実測図　18
第27図　6号塚第3トレンチ西壁実測図　19
第28図　6号塚第4トレンチ北壁実測図　19
第29図　6号塚第2トレンチ北壁実測図　19
第30図　6号塚出土遺物　20
第31図　7号塚全体図　21
第32図　7号塚第1・第3トレンチ東壁実測図　32
第33図　7号塚第2・第4トレンチ南壁実測図　21
第34図　7号塚出土遺物　22
第35図　8号塚全体図　23
第36図　8号塚第1トレンチ北壁実測図　24
第37図　8号塚第2トレンチ北壁実測図　24
第38図　8号塚第3トレンチ北壁実測図　24
第39図　8号塚出土遺物　25
第40図　9号塚全体図　26
第41図　9号塚第1トレンチ北壁実測図　26
第42図　9号塚第2トレンチ東壁実測図　27

第43図　9号塚第3トレンチ北壁実測図　27
第44図　9号塚第4トレンチ北壁実測図　28
第45図　9号塚第5トレンチ北壁実測図　28
第46図　9号塚出土遺物　29
第47図　10号塚全体図　31
第48図　10号塚第1トレンチ西壁実測図　32
第49図　10号塚第2・第4トレンチ北壁実測図　33
第50図　10号塚第3トレンチ西壁実測図　33
第51図　10号塚第7トレンチ北壁実測図　34
第52図　10号塚第5トレンチ南壁実測図　34
第53図　10号塚第6トレンチ南壁実測図　34
第54図　10号塚第8トレンチ南壁実測図　34
第55図　10号塚出土遺物　35
第56図　10号塚出土銭拓影図　36
第57図　11号塚出土遺物　37
第58図　11号塚全体図　37
第59図　11号塚第1トレンチ東壁実測図　37
第60図　11号塚第2トレンチ東壁実測図　37
第61図　12号炭窯実測図・断面図　38

表目次

第1表　青柳塚群遺構一覧表　6
第2表　2号塚出土貝ブロック構成表　9
第3表　2号塚出土遺物観察表　10
第4表　3号塚出土遺物観察表　12
第5表　4号塚出土遺物観察表　15
第6表　5号塚出土遺物観察表　16
第7表　6号塚出土遺物観察表　20
第8表　7号塚出土遺物観察表　22
第9表　8号塚出土遺物観察表　24
第10表　9号塚出土遺物観察表　28
第11表　10号塚出土遺物観察表　35
第12表　11号出土遺物観察表　38

図版目次

図版1　青柳塚群と周辺の地形
図版2－1　1号塚全景
2　2号塚全景
3　2号塚出土貝ブロック検出状況
4　2号塚人骨・銭出土状況
5　3号塚全景
6　4号塚全景
7　5号塚全景
8　6号塚・7号塚遠景
9　6号塚全景
10　7号塚全景
図版3－1　9号塚全景（北西から）
2　9号塚全景（北から）
3　10号塚全景（9号塚から）
4　3号塚からみた9号塚・10号塚
5　8号塚全景
6　11号塚全景
7　10号塚第2トレンチ南壁堆積状況
8　10号塚第4トレンチ東端部堆積状況
9　12号炭窯覆土除去状況
10　12号炭窯完掘状況

1、調査に至る経過

昭和55年6月13日付けで市原市長　井原恒治より、千葉県教育委員会および市原市教育委員会あてに埋蔵文化財の所在の有無の照会がなされた。このことから県および市は現地踏査を行い、塚13基が所在する旨の回答をした。その後、市の担当部局と協議を行ったが、市原市青柳土地区画整理組合設立認可申請者　小出忠より県教育委員会あてに埋蔵文化財の取り扱いについての協議がなされ、昭和62年4月28日付けで県より回答を得た。それによると地区内の文化財は記録保存による発掘調査とするとの内容であった。

これを受けて、市教育委員会は発掘調査を進めるべく土地区画整理組合と協議を行い、その結果合意を得たため、昭和63年10月より調査を開始した。

市原市教育委員会社会教育部　文化課

2、遺跡の位置と環境

青柳塚群は、市原市青柳字円馬戸2212他に所在する。市原市の埋蔵文化財分布地図(1)において、683番とされているものである。現況では各塚の周囲は、水田耕作・畑作が行われており、水田面の標高は2m前後である。これまでの調査の中では、最低位に位置するものであり、海岸平野に位置する数少ない遺跡である。また、青柳地区周辺についての歴史的な展開については、不明な点も多い。ここでは、その地理的・歴史的環境について概観しておきたい。

1）地理的環境

千葉県の土地分類基本調査(2)によれば、本塚群は、地形分類上では、「砂州・砂堆・自然堤防」上に、また、表層地質上では、「泥がち堆積物、現世河成および海岸平野堆積物」あるいは、「砂がち堆積物、現世砂堆積物」上に存在する。一帯は、養老川および前川・今津川などの河川の作用により、旧河道、自然堤防等が複雑に入り組んだ様相を示している。なお、周辺に点在する「島畑」の景観は、河川の氾濫原に特徴的に現れる景観であり、河川の作用を想起させる点で、上述の状況と一致する。海岸平野の動態は、海水面の変動抜きにしては考えられないところである。今日では、海岸上には、コンビナート群が林立し、海からの影響は、皆無と言えるが、それ以前においては、海面の変動、さらには、津波等の影響が大であったと考えられ、不安定な状況であったと考えられる。海水準の変動については、諸論のあるところであるが、縄文海進以降にも、奈良末～平安初、あるいは、中世ににおける、海水準の上昇が指摘されている。(3)このような変動の影響が、実際この付近一帯で認められるかは、地学的な検討を踏まえなければならないところであり、無批判な援用は避けたいが、少なくとも、視野の中には、入れておくべきであろう。現段階においては、最も近い時期の海進後に、海岸平野が展開し、それと同時に河川の作用を受け始め、複雑な地形を形成しつつ、今日に過程の中で、本塚群が出現するという一般的なあり方のみを記述するにとどめておく。

2）歴史的環境

本遺跡周辺の歴史の展開は、上述したような地理的環境と密接に関連したものと言える。特に生産

基盤を考えていく上では、無視し得ない。同一水系とはいえ、養老川下流の左岸と右岸とでは、安定した可耕地の確保の点では、左岸が優ったと考えられ、養老川左岸低地上に出現する姉崎二子塚は、低地への進出を示すものと理解してよかろう。この古墳は、砂堆上に築造されており、この砂堆の形成が、どの時期まで遡るかは不明であるが、この砂堆と袖ケ浦台地間に出現したと考えられる、湿地帯が、その生産基盤と成り得たのではないかと考えられる。ただ、この砂堆を境にして海側が安定した状況になるまでには、さらに時間を要したのではないかと考えられる。また、二子塚以後の低地における歴史的所産についても曖昧である。

万葉集には、「海上潟」をうたった歌が二首ある。この「海上潟」は周辺の低地一帯を指すものと言われており、当時、潟地形が広がっていたことが窺われる。二首をつぎに掲げておく。(4)

「夏麻引く　海上潟の　沖つ洲に　鳥はすだけど　君は音もせず」(巻第七　1176)

「夏麻引く　海上潟の　沖津洲に　船はとどめむ　さ夜更けにけり」(巻第十四　3348)

延喜式には、「嶋穴神社」「姉崎神社」が見られる。(5)いずれも「海上郡」に属すものであり、両社の密接な関係も伝えられているところである。姉崎神社は姉崎古墳群中に所在するが必ずしも系譜は明らかではない。しかし、両者とも眼下に見下ろす海岸平野を生産基盤とする集落を背景に出現したものと理解し得る。嶋穴神社の成立も低地における生産基盤の拡大を、その背景とすることができよう。このことは、逆に、安定した生産基盤を確保し得るような、自然的条件がそれ以前には整っていなかったことを示すものとも考えられる。

これまでは、本遺跡を含めた海岸平野一帯について概観してきたが、ここで青柳地区に焦点を絞ってみることとする。「青柳」と言う名称は、「市原八幡五月會馬野郡四村配分帳」(6)中に「青柳郷」と記載されているのを初現とする。この文書は、「應安五年五月　日」(1372年)の年号が記され、「馬野郡内」の郷として「豊成郷」「嶋穴郷」「入沼郷」とともに「青柳郷」がある。少なくとも、この時点では、低地の開発が進行していたことが窺われる。なお、年号不詳であるが、「馬野郡惣勘文」(7)には、「青柳十二丁一反三百歩」の記載がみられる。「青柳」に関する記載は、その後、江戸時代に入るまで見出せなくなる。江戸時代以降の文書では、肥料としてのキサゴの採取をめぐる相論も見られる。(8)明治時代後半からは、海苔の養殖が始められたことなどが『市原郡誌』(9)に記されており、半農半漁的な営みがうかがえる。青柳地区の名産であった「バカガイ」が「アオヤギ」と称されるに至ったことも、この地の歴史的所産の一つと数えられよう。

以上のような文献資料のほかに、三山供養塚の台座(10)、経筒(11)といった考古資料の存在も貴重なものといえる。台座については、「寛永七年」(1630年)の年号が記されており、市内最古に位置づけられるものである。なお、同台座には、「上総国青柳村成光院」という銘文が刻まれているが、この「成光院」は現存せず、往時の所在地も不明である。時代は前後するが、成田山霊光館所蔵の経筒は「大永八年」(1528年)と刻まれている。この銅製の経筒は、伊藤忞氏が青柳字円馬戸付近において発見したものとのことである。(12)

青柳地区を含め、海岸平野部の歴史については、上述のように非常に断片的であることは否定できないが、そのような状況の中で、今回の調査による成果をいかに位置づけることができるかについては、終章に譲ることとし、以上で当地域の歴史の概観を終えることとする。

〈註、引用･参考文献〉
(1)『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図－北部編－』市原市教育委員会　1988
(2)『土地分類基本調査　姉崎･木更津』千葉県企画部企画課　1979
(3) 小野忠熙「考古地理学からみた響灘沿岸の砂質海岸の形成」『第四紀研究』第14巻　第4号　1975
加藤芳郎「伊場遺跡をめぐる自然環境の地学的検討」『伊場遺跡発掘調査報告書　第2冊伊場遺跡遺構編』浜松市教育委員会　1977
(4)『日本古典文学大系』(岩波書店)に拠る.
(5)『国史大系』(吉川弘文館)に拠る.
(6)『市原市史　資料集(中世編)』市原市教育委員会　1980、資料№436
(7) 同上、資料№497
(8) 長島光二「近世市原郡農村と貝肥採取－史料と考察」『市原地方史研究』第13号　市原市教育委員会　1984
(9)『千葉県市原郡誌　町村誌編』市原郡教育会　国書刊行会版　1985
(10)『市原市史』中巻　市原市教育委員会　1986、796～797頁
(11) 同上、176～177頁
(12) 谷島一馬氏の御教示による.

3、調査の方法と成果の概要

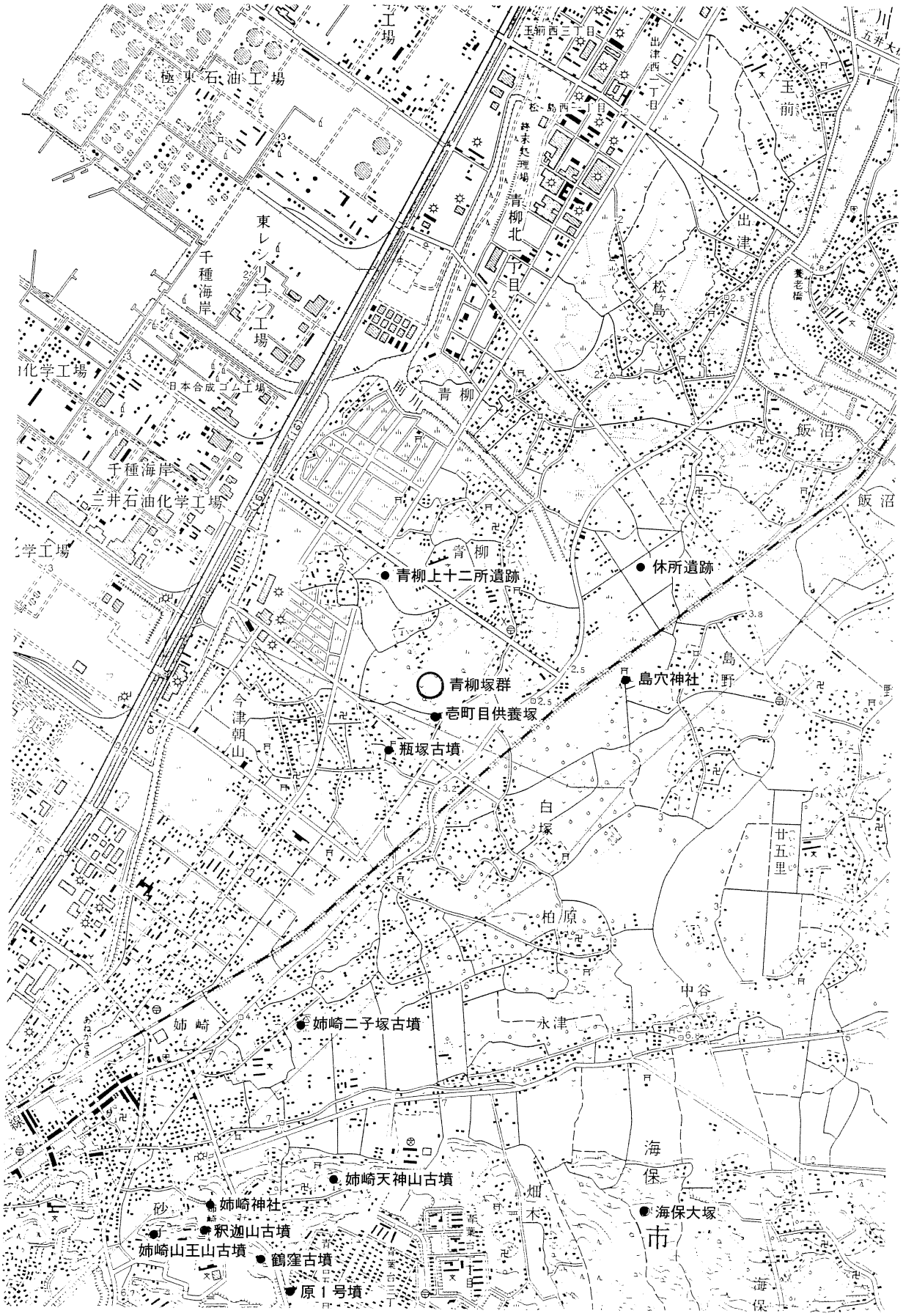
1) 調査の方法

今回の調査の対象となったのは塚11基である。着手の順としては、都市計画道路にかかるもの4基(調査時番号　001～004)について先行して行い、のちそれ以外の7基(005～011)について順次着手した。調査の手順としては、トレンチを設定し遺物等の出土状況を確認しつつ、原則として地表面から2m下げた時点で、それ以上の掘り下げは行わなかった。また、各塚の裾から周囲の水田にかけては、可能な限り掘り下げ、遺物の検出に努めたが、地下水位の高さや、降雨等により常に水没するような状況であり、また、基盤層が砂層であったため、最小限の掘り下げにとどめた。なお、掘削は全て人力で行った。

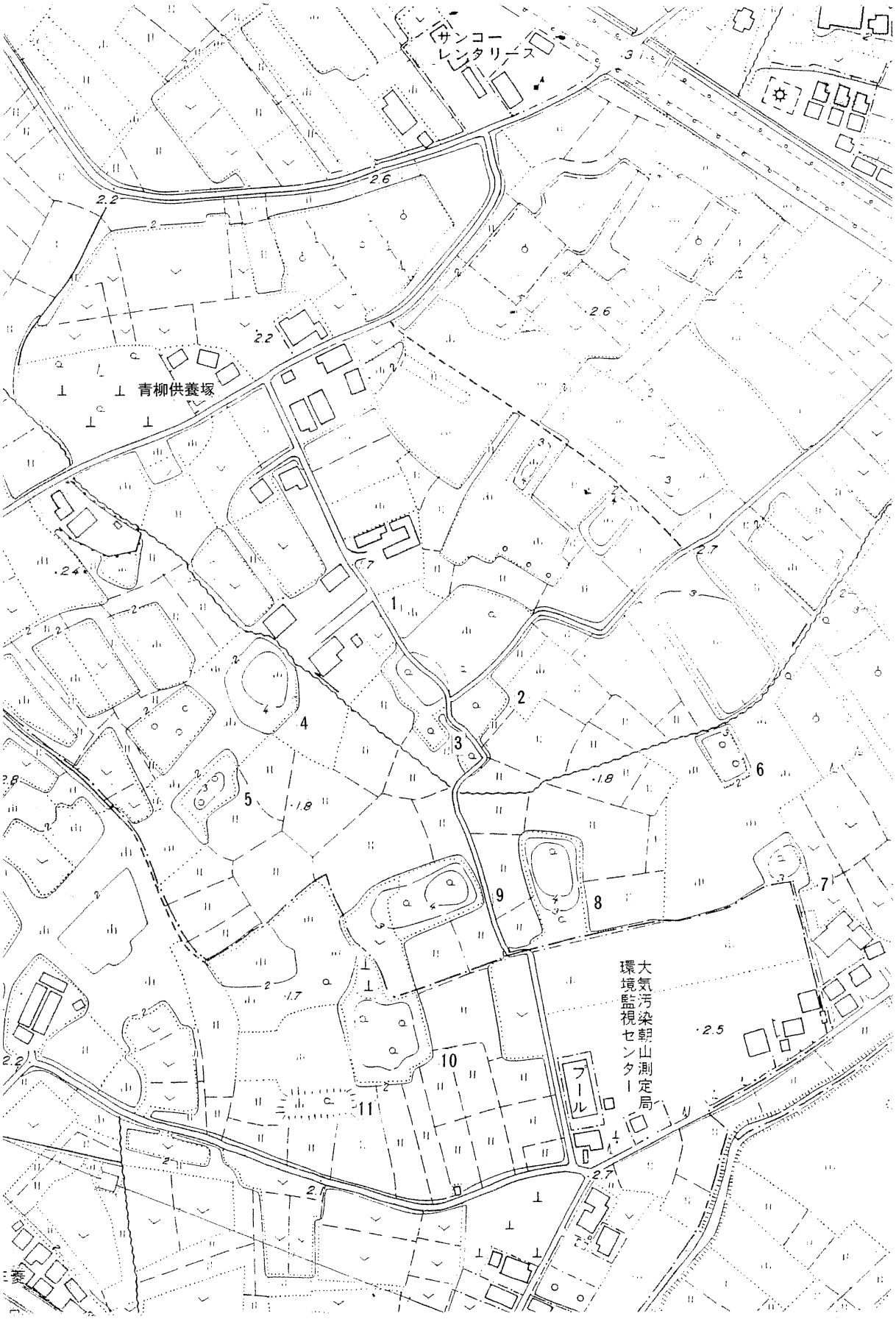
測量については、各塚の基準点および水準の設置を中央航業株式会社に委託し、それ以外の測量については当方で行った。

2) 成果の概要

各遺構については、個別の報告に譲ることとし、ここでは、全般的な特徴について記しておく。各塚は、一基の例外(報告番号10)を除いて、砂のみにより構成されている。灰色の粘質土のブロックがわずかに認められる場合もあったが、ごく微量であった。現況においては、周囲は水田あるいは畑、宅地であって、砂の露呈は認められない。したがって、時期的には不明であるが、塚の成立は、砂の露呈が、広い範囲に及んでいた時期と考えるのが妥当であろう。少なくとも、水田の土を寄せ集めたようなあり方ではない。各塚の形状については、一部で改変を受けていたが、これは墓地として利用



第1図　青柳塚群と周辺の遺跡（S＝1/25000）



第2図　青柳塚群配置図（S＝1/2500）

されたことによる。方形を呈するもの、ナマコ状のもの、不整形のものと形状は様々である点も本塚群の特徴として数える事ができよう。

遺物については、上述のように墓地として利用されている場合もあって、それに伴う遺物も多く含まれている。また、弥生土器、土師器、須恵器、陶器が出土している。特に良好な遺物の出土は認められず、塚と同時期とは認められない。いずれも、二次的あるいは、三次的な移動の結果と思われるが、器壁の磨耗が必ずしも著しくなく、ごく短距離の移動とも思われる。あるいは、近隣に営まれた遺跡の所産かもしれない。

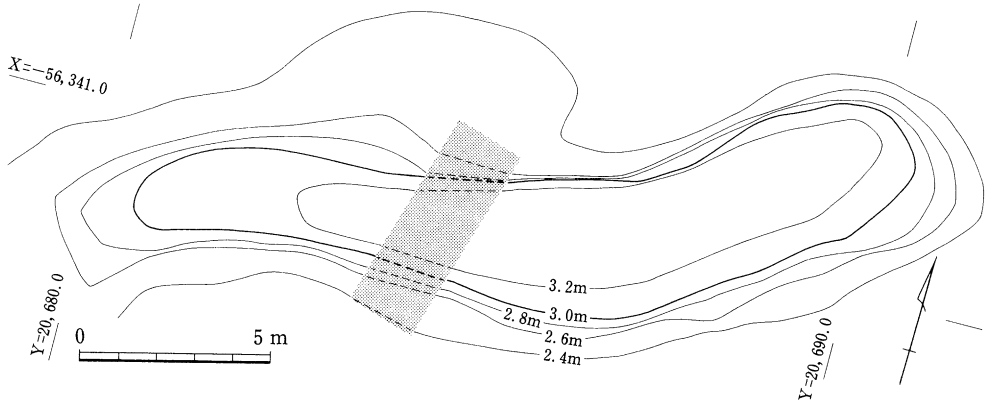
なお、本報告においては、調査時の遺構番号を変更してある。各塚の概要と共に下表に掲げておく。

第1表　青柳塚群遺構一覧表

報告No.	調査No.	形　態	規　模（長径、短径、比高）	出土土器 縄文	弥生	土師	須恵	陶器	磁器	その他	その他の出土遺物	備　考
1	11	土塁状	12×2.5×1.0									
2	8	方形	22×20×3.6			6		6	9	1	人骨　寛永通宝貝	埋葬址検出
3	9	不整形	15×10×2.0			16	2	14	31			
4	1	不整形	30×26×18	1		14		14	10	1		
5	2	ナマコ状 平坦部あり	30×17×2.8	2	1	65	2	17	1	1	木片	
6	4	台形	20×16×4.0			31	1	2	3	6		
7	10	方形 舌状の張り出しあり	22×18×3.2			16		2	4	17		炭窯検出（12号として報告）
8	7	不整形	24×24×3.6			49		17	3	4		
9	3	不整方形	52×26×4.8	5	3	79	3	71	38	9	木片	
10	6	不整形 舌状のはり出しあり	36×26×5.2（舌状部除く）	2		91	1	131	41	8	寛永通宝	
11	5	ナマコ状	36×15×4.0			6		7	3			

4、遺構と遺物

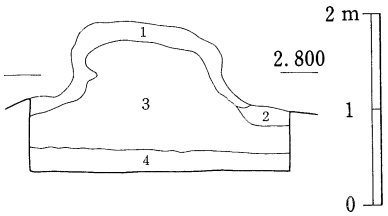
1）1号塚



第3図　1号塚全体図

今回の調査区の中で最も北側に位置するものである。形態的には土塁状を呈する。全長約10メートル、幅約1.5メートル、高さ約1メートルである。トレンチはほぼ中央に設定した。均質な砂により構成されていた。

遺物の出土は皆無であった。



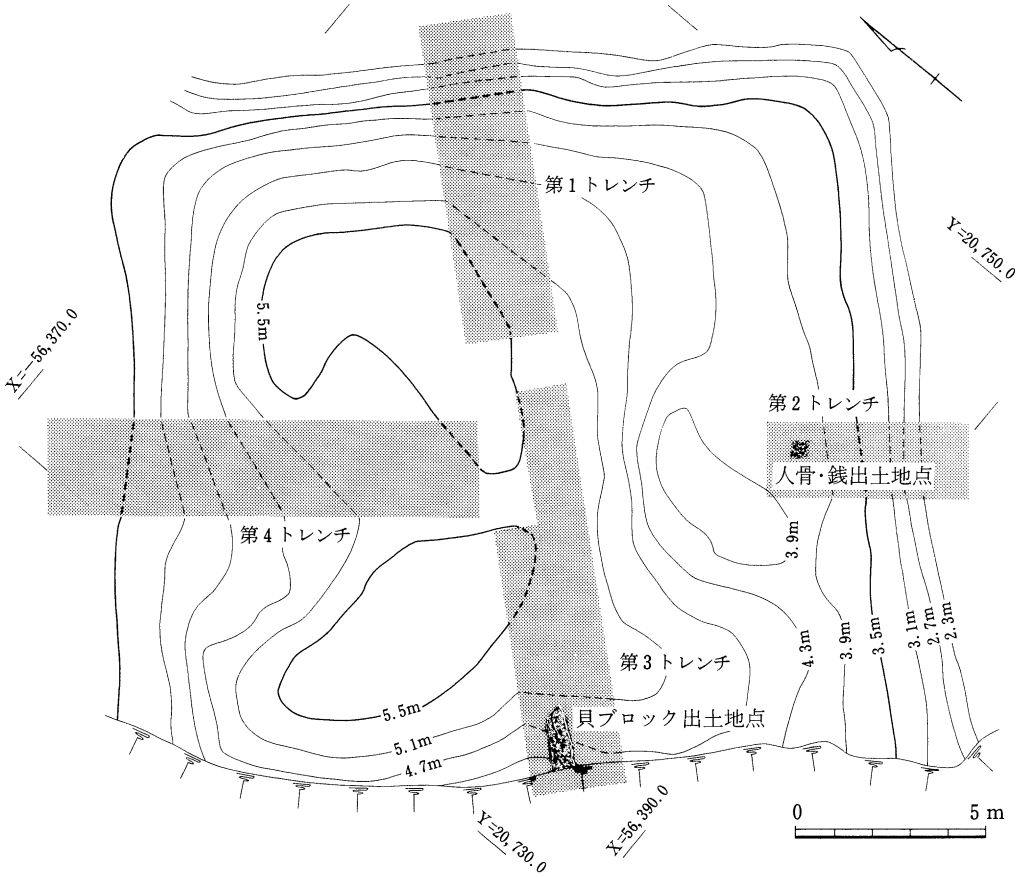
第4図　1号塚トレンチ東壁実測図

1．黒褐色砂(表土)
2．暗褐色砂
3．暗黄褐色砂
4．暗灰色砂(やや青味)褐色の斑あり

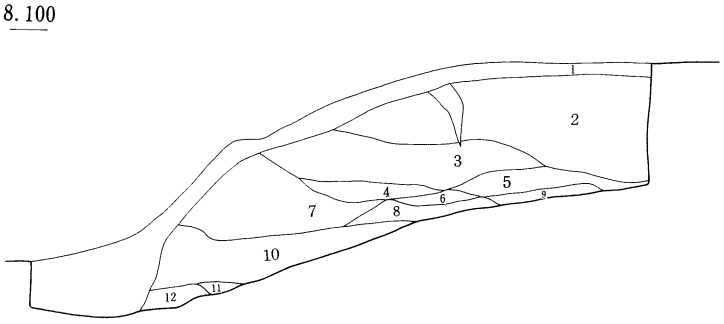
2）2号塚

不整な方形を呈し、一辺約10メートルである。南西の辺は切り通されており、北東および南東は水田に接している。頂部には、調査開始直前まで墓地が営まれていた。トレンチは十字方向に設定した。第3トレンチ中層においてイボキサゴを主体とする貝ブロックが確認された。第2トレンチの下層、水田面よりやや高い位置からは寛永通宝と共に人骨が出土した。

貝ブロックについては、当該部分を拡張して、範囲を確認した。資料は持ち帰り、フルイにかけて水洗したのち、選別した。その結果は第2表に示す通りである。魚類の背骨もわずかに認められたが、種の同定は困難であった。また、土器等の共伴はなかった。したがって、この貝ブロックの形成時期については不明である。

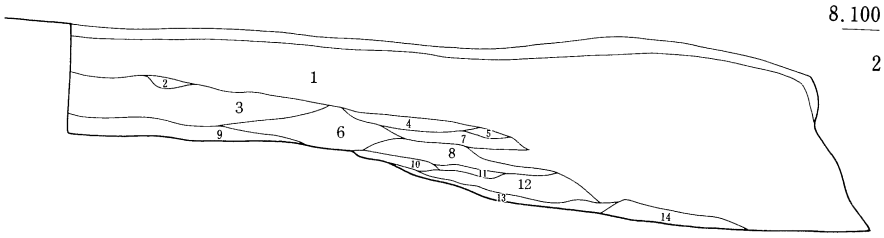


第5図　2号塚全体図



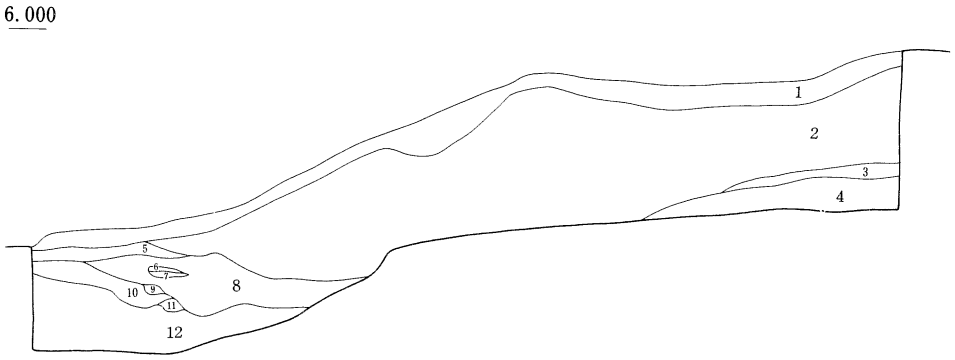
1．表土　暗褐色砂
2．暗黄褐色砂
3．暗褐色砂(やや黒味強い)
4．暗褐色砂(上層より黒味強い)
5．暗褐色砂(細砂多い)
6．暗褐色砂(やや黒味)
7．暗黄褐色砂
8．暗褐色砂
9．暗褐色砂
10．暗黄褐色砂
11．黒褐色砂
12．暗灰色砂

第6図　2号塚第1トレンチ南東壁実測図

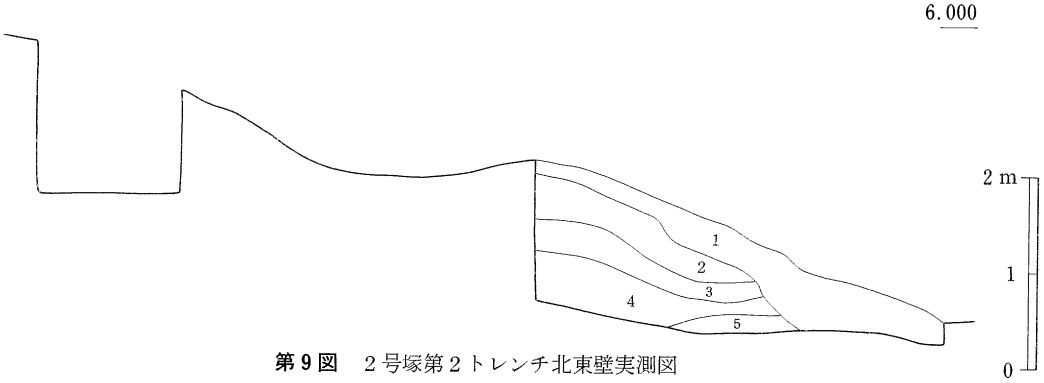


1．暗黄褐色砂
2．暗黄褐色砂
3．暗黄褐色砂
4．暗黄褐色砂(やや黒味)
5．暗黄褐色砂＋黒色砂
6．暗黄褐色砂
7．暗黄褐色砂(黒味)
8．暗黄褐色砂(細礫わずかに含む)
9．暗黄褐色砂
10．暗褐色砂
　わずかに粘質ブロック
11．暗褐色砂
12．暗褐色砂　粘質土ブロック
13．暗灰色砂
14．暗灰褐色砂

第7図　2号塚第3トレンチ南東壁実測図



第8図　2号塚第4トレンチ北東壁実測図



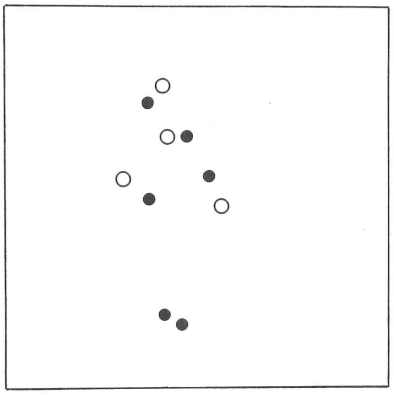
第9図　2号塚第2トレンチ北東壁実測図

第4トレンチ
1．表土　黒色層
2．暗黄褐色砂
3．暗黄褐色土(やや白味強い)
4．暗黄褐色砂
5．暗褐色砂(やや褐色強い)
6．暗褐色砂(黒色強い)しまりあり
7．暗褐色砂　しまりあり
8．黒褐色砂
9．暗灰色砂＋暗褐色砂　しまりあり
10．暗灰色砂＋暗褐色砂　(ねずみ色)しまりありやや粘質　有機質あり

第2トレンチ
1．表土　黒褐色砂
2．暗褐色砂
3．暗黄褐色砂(細礫をわずかに含む)
4．暗黄褐色砂
5．暗灰褐色砂(水分多い)

第２トレンチから出土した人骨は、残存状態は極めて悪く、頭蓋骨と思われる骨の一部と歯が数本検出されたのみである。その上層からは板材に付着した状態で寛永通宝が出土し、また、人骨除去後も寛永通宝が検出された。埋葬に伴って納められたものと思われる。なお、埋葬に伴う墓壙の痕跡は確認できなかった。

上記の他に、図示したような遺物の出土が認められた。頂部に墓地が営まれていたことにより、近世以降の、陶器、磁器の出土がほとんどであった。

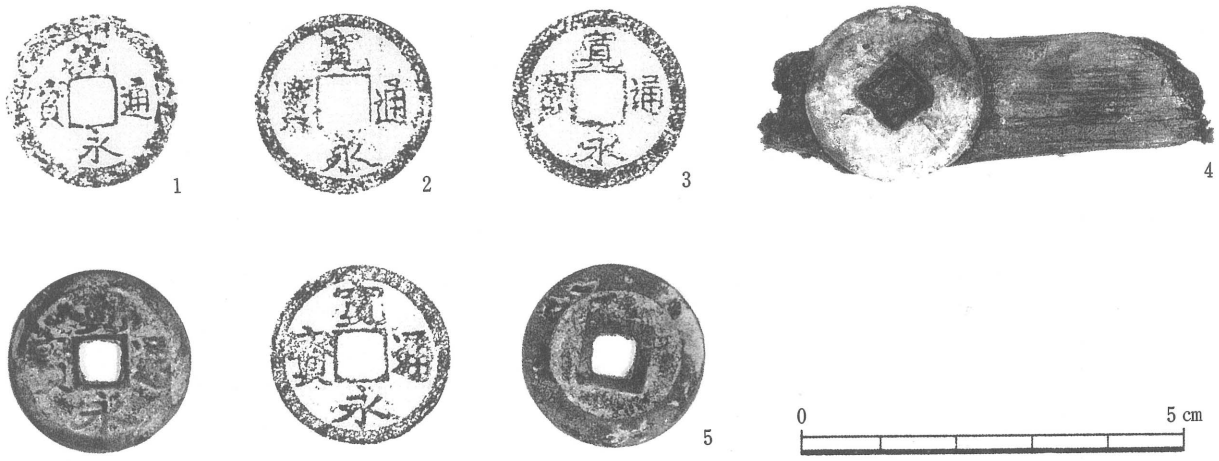


第10図　２号塚第２トレンチ人骨、銭出土状況模式図

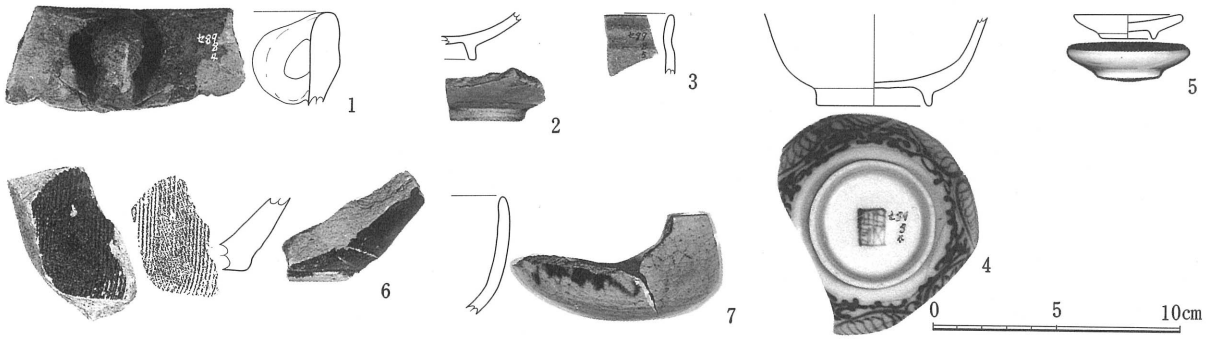
第２表　２号塚出土貝ブロック構成表

品名	個数	重さ(g)
まき貝		
キサゴ	12277	6400
ウミニナ	567	410
アラムシロ	237	77.3
スガイ	75	33.7
スガイ（フタ）	18	0.9
マツムシ貝	3	1.1
ツメタ貝	2	3.4
ムシエビ	1	0.1
イボニシ	1	0.2
キセルガイ	1	
オカチョウジガイ	8	
不明	1	
不明	6	0.2
小計	13197	6926.9

品名	個数	重さ(g)
二枚貝		
ハマグリ	113(56)	54.9
アサリ	77(38)	39.8
シオフキ	22(11)	6.7
アオヤギ	5（2）	1.2
マテ貝	2（1）	0.4
サルボー貝	2（1）	2.2
カガミ貝	5（2）	17.1
カキ	6（3）	2.6
カシパン		13.2
小計	232(114)	138.1
小片		421.5
合計	13429	7486.5



第11図　２号塚出土銭拓影図



第12図　2号塚出土遺物

第3表　2号塚出土遺物観察表

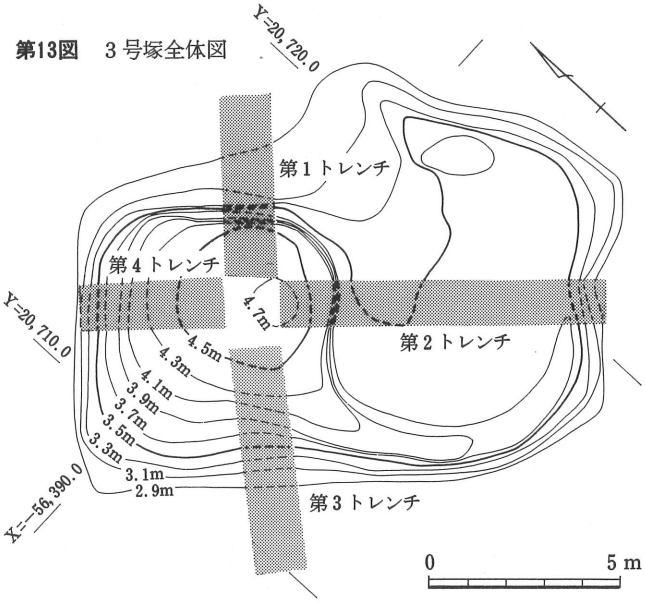
No.	種類	器種	部位	法量・形態の特徴	技　法	胎　土	色調 外面	色調 断面	色調 内面	備　考
1	焙烙(内耳)			口縁部は、ほぼ直立し肥厚する	肥厚した口縁部外面は横位のナデそれより下方は荒れている。内面は横位のナデ、耳の取り付けは括でナデつけた程度	赤色粒子をわずかに含む	黒褐色 5 YR 1/3	橙色 5 YR 6/6	明赤褐色 5 YR 5/6	
2	陶器	椀		体部はやや内湾する	内面全面及び底部及び底部外周を除く、外面に白色釉。細かい貫入あり	精良	灰白 2.5GY 8/1 無釉部 灰黄 2.5Y 7/2	灰白 N 8/1	灰白 2.5GY 8/1	
3	陶器	鉢	口縁	口縁部は、一旦わずかに内湾したのちゆるい「く」の字状を呈して外反する	内面は青灰白釉、外面は灰釉を施す	精良	オリーブ黄 5Y 6/3	浅黄 2.5Y 7/3	青灰 5 BG 6/1	
4	磁器	碗		4.8	内面中央に文様、底部外面に印判(判読できず)外面全面に草文(芋か)	精良	明緑灰色 10GY 8/1	灰白色 10Y 8/1	明緑灰白色 10GY 8/1	
5	磁器	小皿		1.0　4.4　2.2 体部は比較的平坦、外面底部中心がやや凸	体部内面にラセン状の整形痕、接地部に砂付着、高台接地部以外全面施釉		明緑灰色 10GY 8/1		明緑灰色 10GY 8/1	
6	陶器	すり鉢		底部外縁に高台風の削りあり	体部はヨコナデ	比較的きめ細かく小礫わずかに含む	暗赤褐色 7.5R 3/2	にぶい橙色 7.5YR 7/4	褐灰色 10YR 4/1	条線の単位不明瞭。磨耗著しい
7	陶器	碗		口縁は、わずかに内反しつつ直立する	内外面に施釉、貫入あり絵付あり	精良	灰色 7.5Y 8/2	灰色 7.5Y 8/1	灰白 7.5Y 8/2	

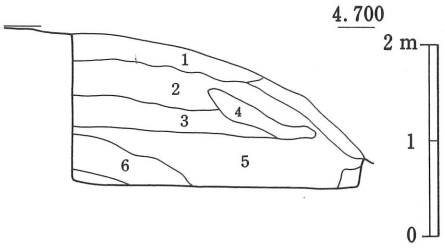
3）3号塚

2号塚とは、農道を挟んで西側に存在する。形態的には不整形である。2号同様調査開始直前まで墓地が営まれていた。暗灰色の砂により構成されていた。

おもな出土遺物は図示した通りである。墓地に伴う遺物が多くほとんどが近世あるいは近・現代の遺物と思われる。他に土師質の鉢が二点出土し、これらはほぼ完形に復元された。この二点については時期は不明確である。また、土師器や須恵器も破片とはいえ出土している。近隣に当該期の遺跡の存在をうかがわせるものである。

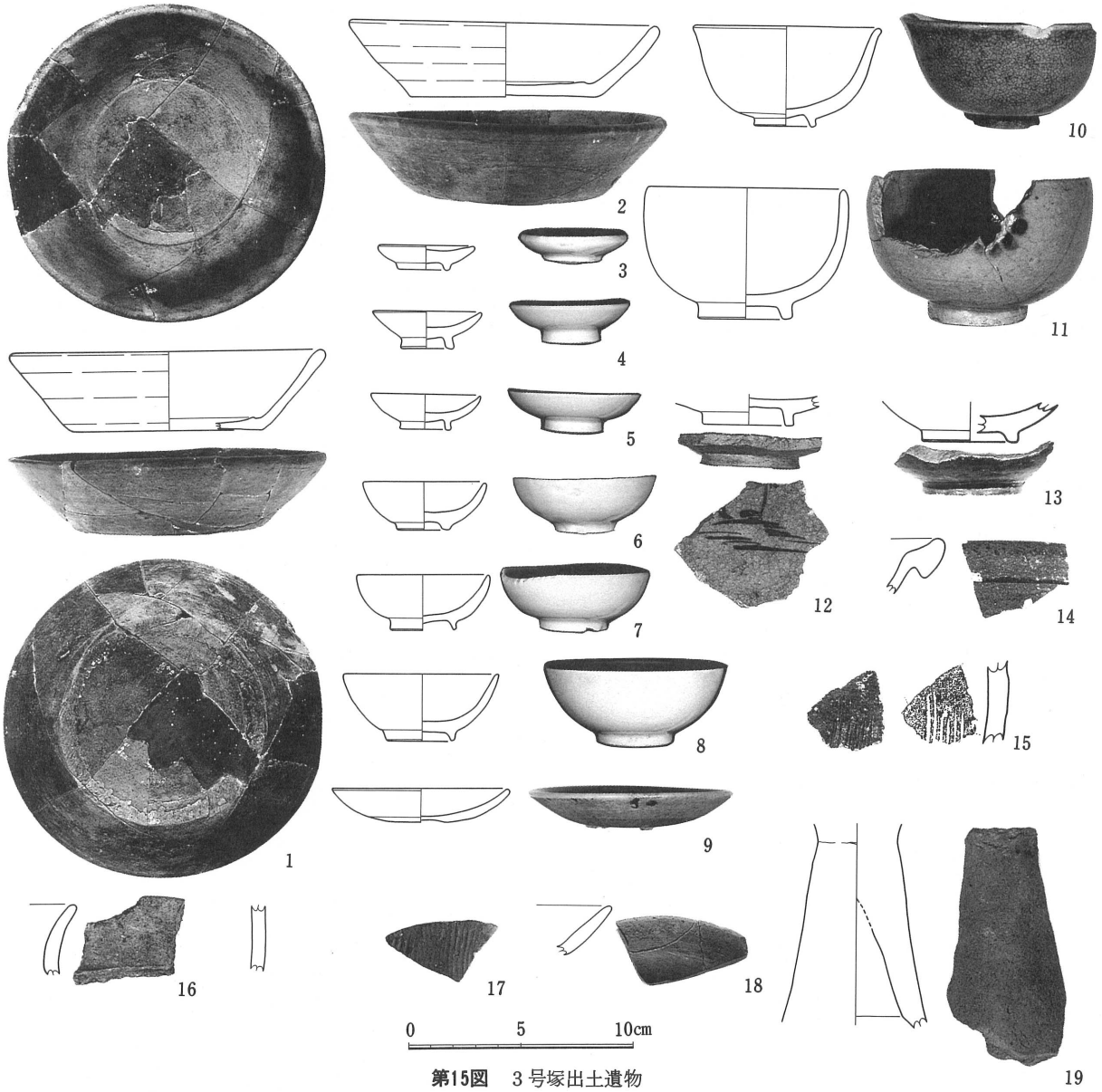
第13図　3号塚全体図





第14図　3号塚第4トレンチ西壁実測図

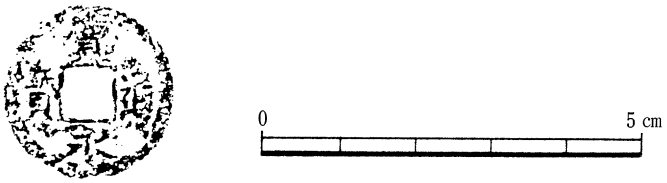
1．表土
2．暗褐
3．暗黄褐色砂　やや黄色強い
4．黒色砂
5．暗黄褐(やや褐色味)
6．暗黄褐



第15図　3号塚出土遺物

第4表　3号塚出土遺物観察表

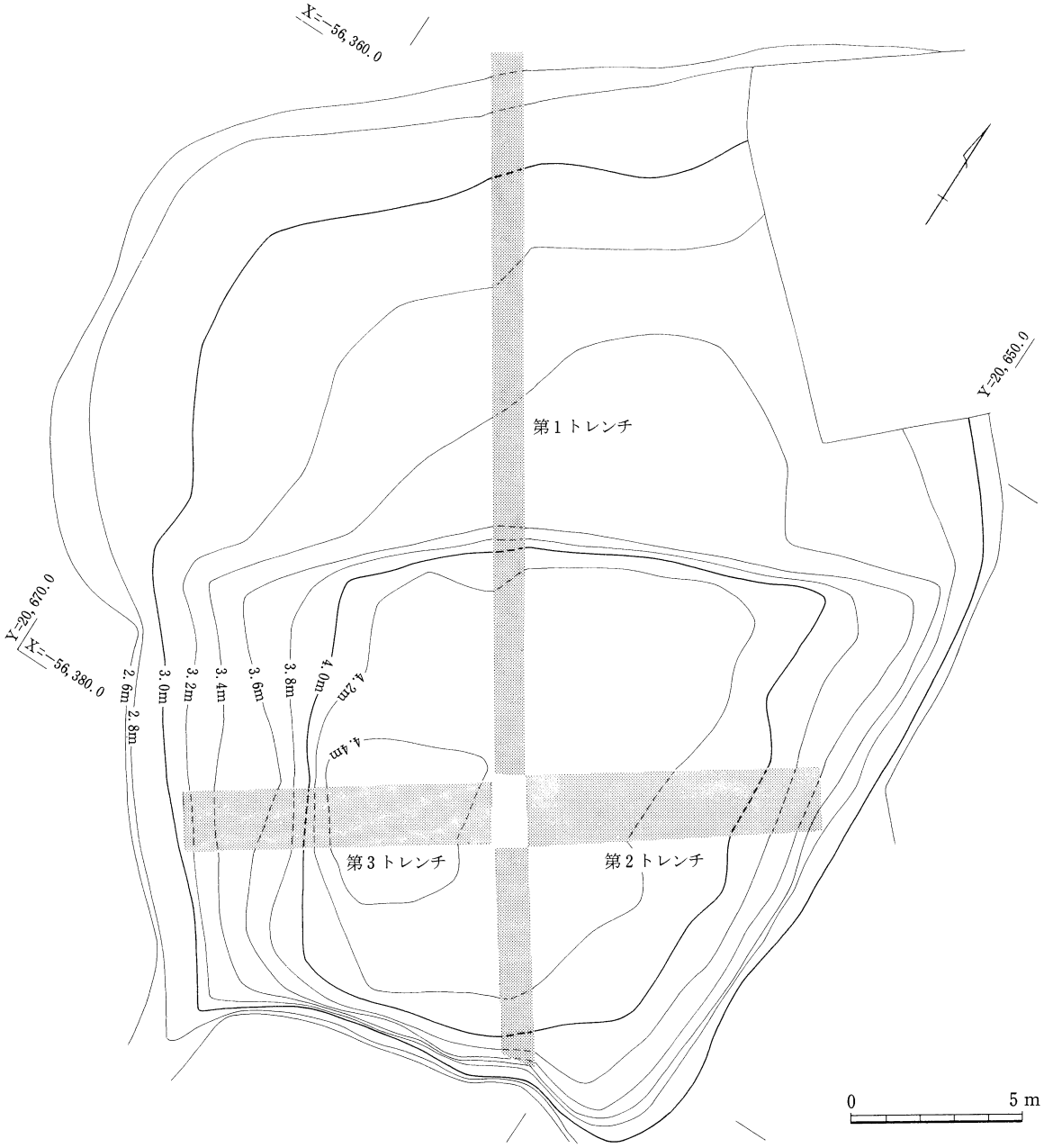
No.	種類	器種	部位	法量・形態の特徴	技　法	胎　土	色調 外面	色調 断面	色調 内面	備　考
1	陶器	鉢		4.7　18.8　11.4 平底で体部は直線的に外方へ開く内面体部と見込みの境界は凹状を呈する	内面全面外面体部はヨコナデ底部回転の糸切り無調整底部外面の外周は体部からの粘土をこすりつけたような痕跡がある	赤色粒子を含む	橙 5 YR 6/6	同左	同左	
2	陶器	鉢		4.4　18.8　11.2 平底で体部は直線的に外方へ開く内面体部を見込みの境界は凹状を呈する	内面全面体部外面はヨコナデ底部は回転糸切り無調整	赤色粒子を含む	橙5 YR 6/6	同左	同左	
3	磁器	小皿		1.1　4.4　2.4 体部は平均的平坦底部は厚い	器面微妙な凹凸が多い、手づくねかぼぼ全面施釉(体部外面の一部、高台接地部を除く)		明緑灰色 10 GY 8/1			
4	磁器	小皿		1.7　4.8　2.4 底部中心は内外面ともにやや凸	高台接地部を除く全面を施釉	精良	灰白色 N 8/	灰白色 N 8/		
5	磁器	小皿		1.6　4.8　2.3 底部中心は内外面ともにやや凸	高台接地部以外、全面施釉高台内側に砂付着		灰白 N 8			
6	磁器	小碗		2.2　5.4　2.4 内面底部中心やや凸	高台接地部以外全面施釉施釉が不均等のため器表に微妙な凹凸がある。高台接地部に砂付着		明緑灰色 10 GY 8/1	灰白色 N 8/	明緑灰色 10 GY 8/1	
7	磁器	小碗		2.5　5.6　3.0 底部外面中央はやや凸	高台接地部以外全面施釉		灰白色 N 8/		灰白色 N 8/	
8	磁器	小碗		3.0　7.0　3.0	高台接地部以外全面施釉		灰白色 N 8/		灰白色 N 8/	
9	陶器	灯明皿		1.5　8.0　2.6 底部外面は凹	内面のみに灰釉施釉、貫入あり、外面体部上半は、ヨコナデ、下半および底部は回転ヘラケズリ	精良	灰白 2.5Y 7/1		灰白5 Y 7/1	
10	陶器	碗		4.5　8.4　3.6 口縁端部はわずかに外反する底部外面中心はやや凸	外面底部および底部外周以外全面施釉、細口に貫入あり無釉の部分でヨコナデが認められる	精良	灰黄色 2.5Y 7/2	灰白色 10Y 8/1	灰黄色 2.5Y 7/2	
11	陶器	碗		5.9　8.6　4.4 体部は内湾気味にすぼまる	高台内および高台外周を除いて全面に透明釉粗い貫入あり外面に花文	精良	灰白色 7.5Y 7/2 地灰白 7.5Y 8/1	灰白色 10Y 8/1	灰白色 7.5Y 7/2	
12	陶器	皿	高台	4.0	下絵付ののち透明釉施釉し内外面とも施釉貫入あり外面は高台および周辺は無釉	砂粒をわずかに含む	浅黄色地 2.5Y 7/3	同左	浅黄色 5 Y 7/3	
13	陶器	碗		4.4	内面は線がかかった透明釉貫入あり外面は高台接地部以外全面褐釉	精良 気泡がやや多い	暗褐色 7.5 YR 3/4	灰黄色 2.5Y 7/2	明緑灰 10 GY 8/1	
14	陶器	カメ	口縁	口縁端部は外方へ一旦開いたのちわずかに内湾する	ヨコナデ、内外面共に鉄釉を施し、光沢がある	黒色粒子を多く含む	暗赤褐色 5 YR 3/6	淡黄色 2.5Y 8/3	暗赤褐色 5 YR 3/6	
15	陶器	すり鉢			内外面に褐釉外面ヨコナデ条線は7＋α	小礫を含む	極暗赤褐 2.5 YR 2/3	灰白 7.5Y 8/1	極暗赤褐 10R 2/3	
16	土師	カメ	口縁	口縁はゆるいカーブを描き外方へ開く	内面横位のナデ(?)外面はたて方向のケズリ	砂粒を多く含む石礫をわずかに含む	にぶい赤褐 5 YR 5/3	褐灰 5 YR 5/1	にぶい褐 7.5 YR 5/3	
17	須恵	カメ	胴		外面タタキ目、内面わずかに同心円の当て具痕	精良	灰 5 Y 6/1	同左	同左	
18	土師	小皿		口縁は直線的に大きく外反する	内外面ともヨコナデ	精良	にぶい橙 5 YR 7/4	同左	同左	
19	土師	高坏	脚		器表磨耗のため不明	砂粒を多く含む	明赤褐色 2.5 YR 5/8	同左	橙 2.5 YR 6/6	



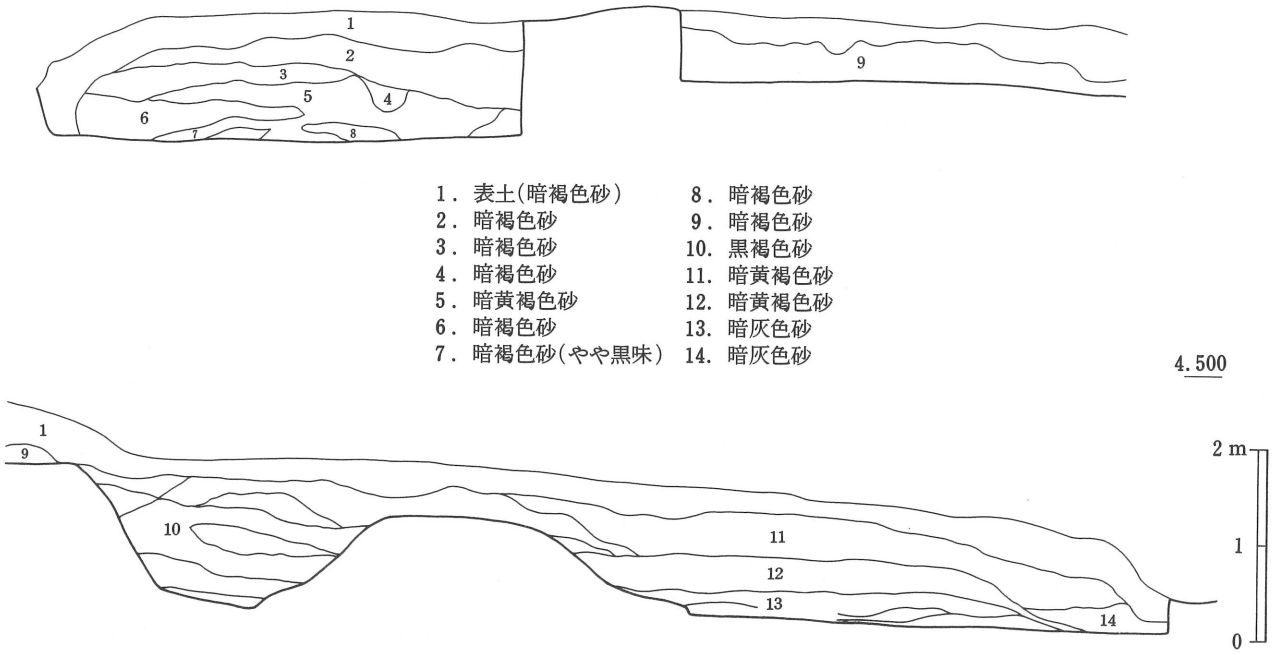
第16図　3号塚出土銭拓影図

4）4号塚

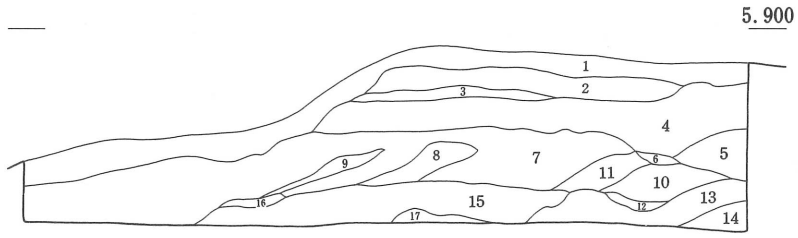
一辺約10メートルの不整の方形を呈し、南側には一段高まった平坦な部分がある。トレンチは十字方向に設定した。暗灰色の砂により構成されている。一部、粘性の強い土の堆積が認められた。



第17図　4号塚全体図

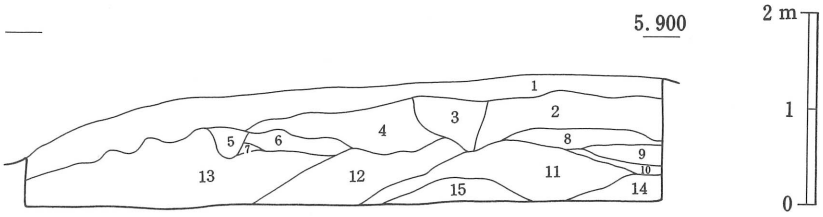


第18図　4号塚第1トレンチ西壁実測図



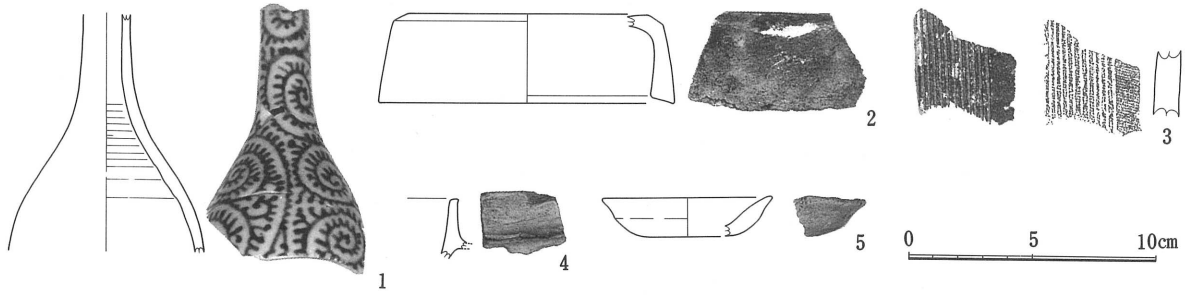
1．表層(やや土壌化、黒色)
2．黒色砂
3．暗褐色砂
4．黒色砂
5．灰褐色砂(褐色やや強い)
6．灰褐色砂(粘土ブロック)
7．灰褐色砂
8．黒色砂
9．黒色砂
10．灰褐色砂(やや黒味)
11．灰褐色砂(砂粒やや粗)
12．黒色砂
13．灰褐色砂
14．黒色砂
15．黒色砂
16．灰褐色砂(粘土ブロック含む)
17．灰褐色砂

第19図　4号塚第3トレンチ北壁実測図



1．表層(黒色土壌化)
2．灰褐色砂
3．黒色砂
4．黒色砂
5．黒色砂
6．暗灰褐色砂
7．灰褐色砂
8．暗灰褐砂
9．黒色砂
10．暗灰褐色砂(粘土ブロック含む)
11．暗灰褐色砂
12．黒色砂(やや褐色)
13．暗灰褐色砂
14．黒色砂(炭化物含む)
15．黒色砂

第20図　4号塚第2トレンチ南壁実測図



第21図　4号塚出土遺物

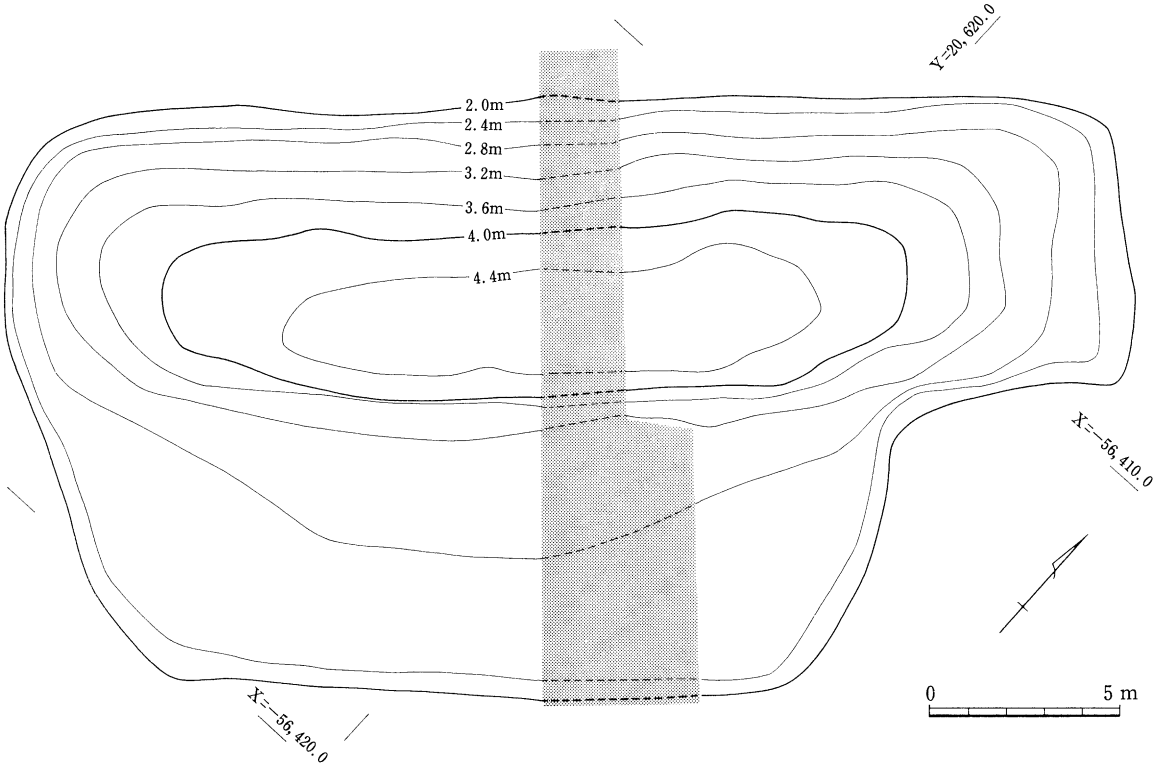
遺物は図示したようなものが出土している。無釉の蓋と思われる遺物については所属時期は不明である。蛸唐草文の一輪差しについては肥前系とみておきたい。

第5表　4号塚出土遺物観察表

No.	種類	器種	部位	法量・形態の特徴	技　法	胎　土	色調 外面	色調 断面	色調 内面	備　考
1	磁器	一輪差			全面に蛸唐草文、発色は淡い内面頸の部分のロクロ目顕著	精良	明青灰地 5B 7/1	灰白 N81	灰白色 5Y 8/1	
2	無釉	蓋		円錘台形、天井部はやや凹	内外面ともにヨコナデ肩部は幅1㎝弱のケズリがある焼成はやや甘い	精良	灰黄色 2.5YR 7/2	灰白色 10YR 8/2	灰色 5Y 6/1	
3	陶器	すり鉢			内外面に褐釉　条線は11＋α	小礫を含む	暗赤褐 5YR 3/4	灰白 2.5Y 8/2	外面に同じ	
4	土器	羽釜?		口唇部は水平でわずかにしぼむ	外面はヨコナデ、内面は横位のナデ	精良	にぶい橙色 7.5YR 7/3	灰色 N61	外面に同じ	
5	かわらけ	小皿		1.7　7.0　4.0 口縁部はゆるやかに外反する	内外面ともにヨコナデ	砂粒を一様に含む	橙色 5YR 6/6 にぶい橙 5YR 7/4	にぶい橙 5YR 6/4	にぶい橙 5YR 7/4 および橙 5YR 6/6	いわゆる土師質土器の色調に類似

5）5号塚

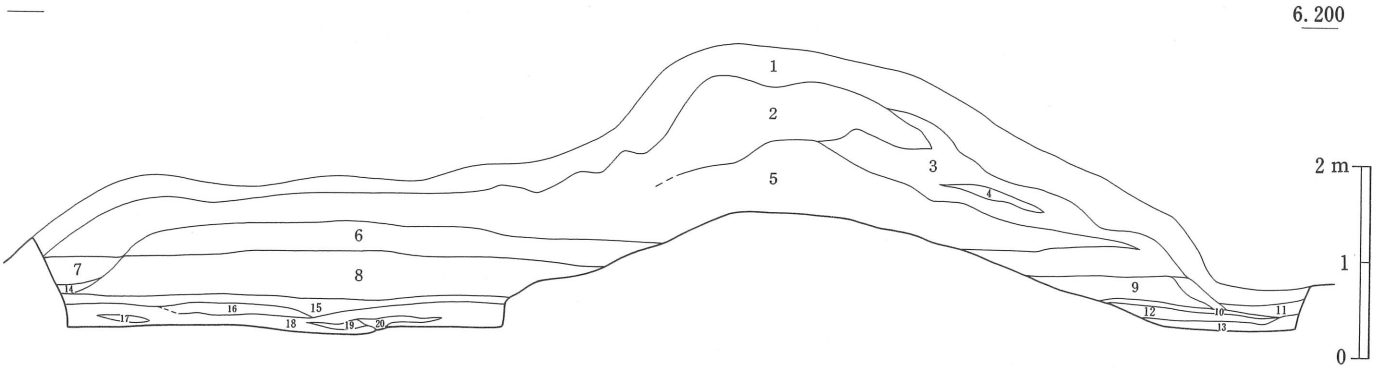
北半はナマコ状を呈し、南側に一段低い平坦部がある。周囲は水田に囲まれていた。トレンチは遺構を横断する形で設定した。構成土は、灰色の砂および暗灰色の砂である。水田面よりやや高い位置



第22図　5号塚全体図

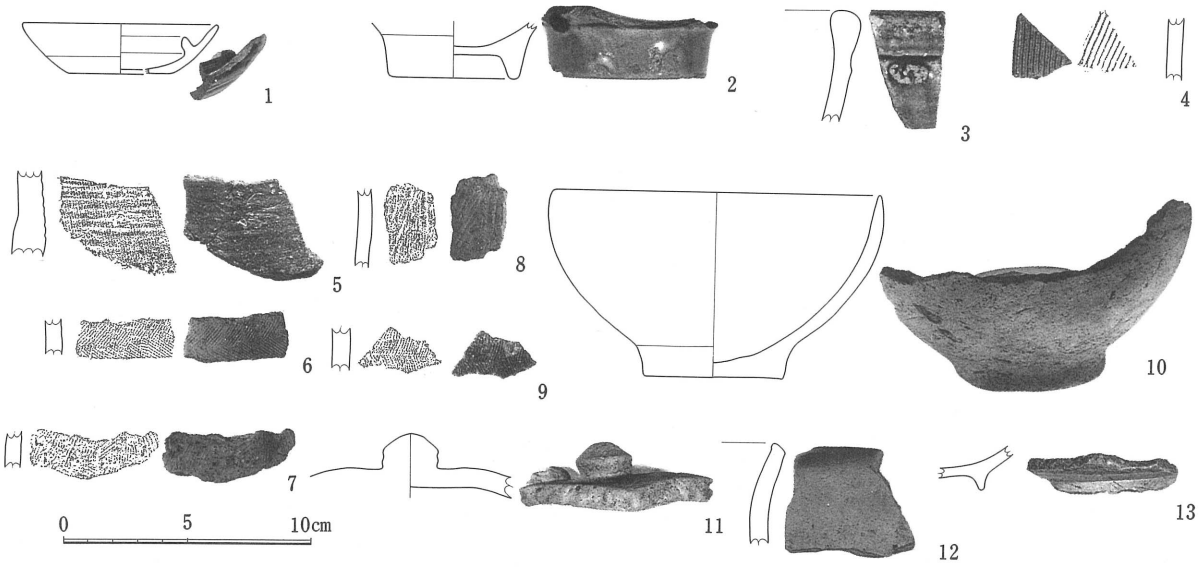
に黒味の強いほぼ水平の層が一枚あり、その下にグライ化した青味を帯びた砂層が確認された。

遺物は比較的上位の層から陶器類が出土し、水田面より、下位の層からは縄文土器、弥生土器が出土している。また、図示しえなかったが、下層からは、木片が出土している。



第23図　5号塚トレンチ西壁実測図

1．表土
2．暗黄褐色砂
3．暗黄褐色砂
4．暗褐色砂
5．黒褐色砂
6．黒色砂
7．暗灰色砂
8．灰褐色砂(暗青灰色の斑顕著)
9．黒褐色砂
10．暗灰色砂
11．暗褐色粘質土
12．暗黒褐色砂　褐色斑あり
13．暗灰色シルト
14．暗青灰色粘質土
15．暗灰褐色粘土
16．暗灰褐
17．黒色粘質ブロック含む　炭化片含む
18．暗灰色砂
19．暗灰色シルト
20．粗い砂層



第24図　5号塚出土遺物

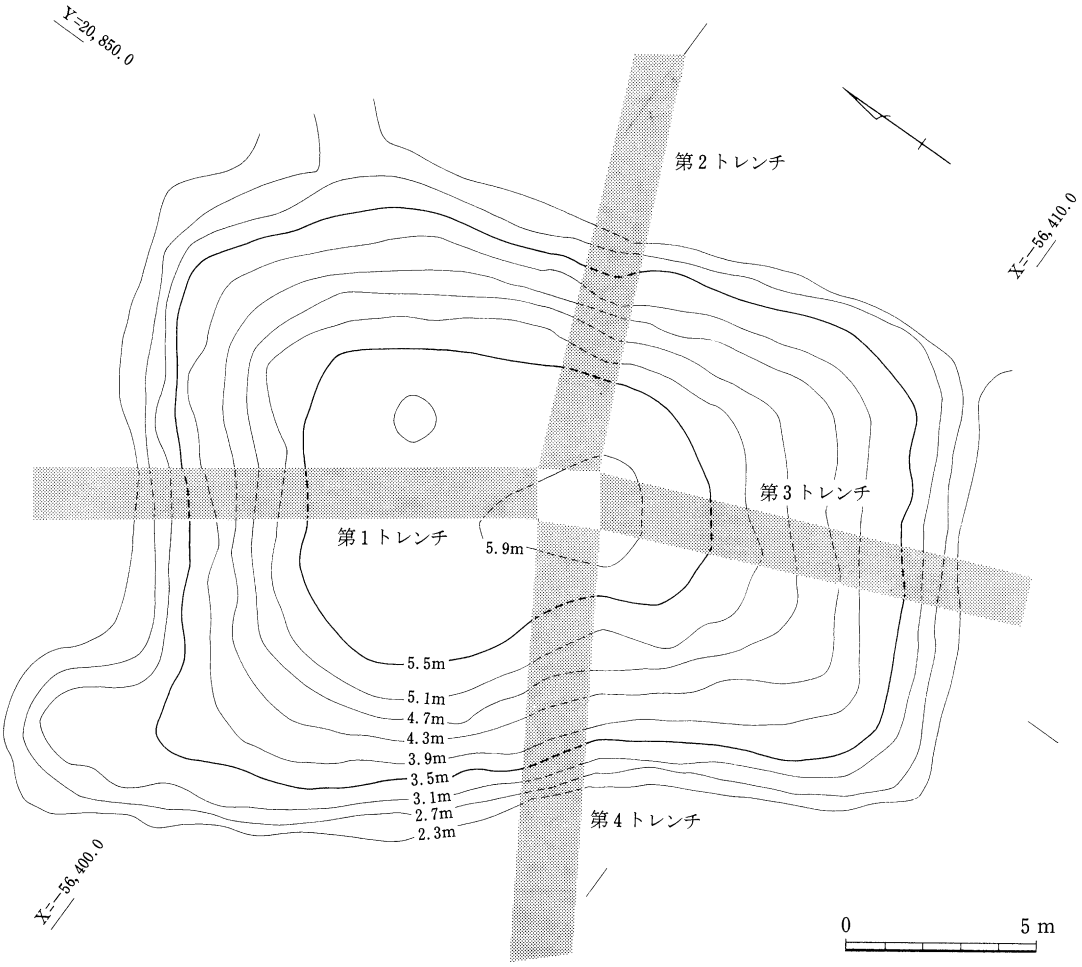
第6表　5号塚出土遺物観察表

No.	種類	器種	部位	法量・形態の特徴	技　法	胎　土	色調			備　考
							外面	断面	内面	
1	陶器	灯明皿		2.1(8.0)(4.0)	内面全面に褐釉、外面口縁付近も施釉の重ね焼き痕跡	精良	地 灰白色 5Y 7/1	灰色 7.5Y 6/1	暗赤褐 10R 3/3	
2	陶器	碗		5.0	高台接地部は無釉、接地部以外にも高台の内外面に無釉の部分がある底部中央に梅花文(呉傾)	精良 小さい気包が認められる	灰白 10Y 7/1	灰白 5Y 7/1	灰白 10Y 7/1	広東碗型
3	陶器	鉢		口縁部はほぼ直立し肥厚する。口縁下に残る沈線その下は付文	内外面に黄釉を施釉(内面は、口縁下まで)	精良	黄褐 2.5Y 5/4	灰黄 2.5Y 6/2	灰白 5Y 8/2 黄褐 2.5Y 5/4	
4	陶器	すり鉢			外面は光沢のある褐釉、内面無釉条線は10＋α条線部断面は鋸釉状	砂粒を含む	暗赤褐 10R 3/3	褐灰 10R 4/1 ＋ にぶい赤褐 5YR 5/3	にぶい赤褐 5YR 5/3	
5	縄文				外面横方向の条痕内面横方向のケズリ	繊維含む	黒 7.5YR 2/1	同左	暗褐 7.5YR 3/4	
6	弥生	壺	胴		外面2段の羽状縄文	砂粒含む	にぶい褐 7.5YR 1/3	にぶい黄橙 10YR 7/2	明褐灰 7.5YR 7/2	
7	土師	カメ	胴		外面たて方向のハケ内面横方向のケズリ	砂粒顕著に含む	にぶい橙 7.5YR 7/3	同左	同左	
8	土師	カメ	胴		外面たて方向のハケ内面ナデ	精良	にぶい橙 5YR 6/4	同左	にぶい褐 7.5YR 6/3	
9	土師	カメ	胴		外面ハケ 内面ナデ	砂粒多く含む	黒褐 5YR 3/1	明赤褐 5YR 5/6	同左	
10	土師	鉢		5.6 底部は平底で体部はゆるいカーブを描きながらわずかに内湾する	外面口縁部は横位のナデ、それ以下は斜方向のケズリののちナデ、内面上位は横位のナデ、底部には放射状のアテ具痕	砂粒を多く含む	にぶい黄橙 10YR 8/3	淡黄 2.5YR 8/3	淡黄 2.5YR 8/3	体部および内面に黒斑あり
11	土師	坏	蓋	比較的平坦な天井部に擬宝珠つまみがつく	器表磨耗のため不明瞭	赤色粒子を顕著に含む	にぶい橙 7.5YR 7/3	同左	同左	(土師器としておく)
12	土師		端部	口縁端はわずかに屈曲する	内外面とも横位のナデ	砂粒小礫を含む	にぶい橙 7.5YR 7/3	同左	同左	端部は灰褐色 (5YR 5/2)
13	灰釉陶器	皿		高台は三角形を呈する	ヨコナデ付け高台・内面のみ施釉	精良	灰白色 5Y 8/1	同左	灰白色 5Y 7/2	重ね焼の痕跡が内面および高台(接地部)で認められる

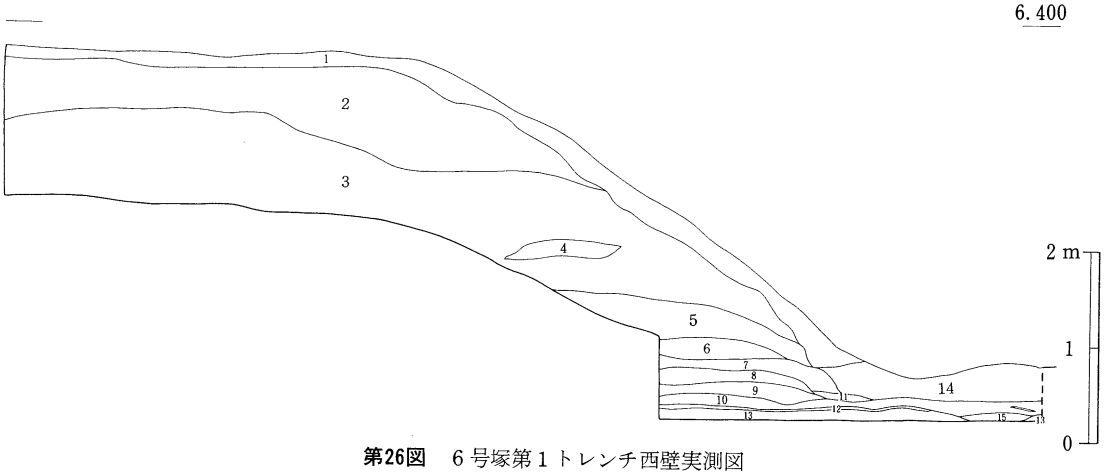
6) 6号塚

一辺約20メートルの方形を呈し、高さは約3メートルである。トレンチは十字に設定した。南トレンチの中層から、磁器の碗が出土している。また、水田面からわずかに高い位置から土師器片を出土している。

南トレンチから出土した碗は、高台が高い、いわゆる「広東碗」型といわれるもので、体部には、蛸唐草文が巡っている。下層から出土した土師器はハケメを有するものが多い。

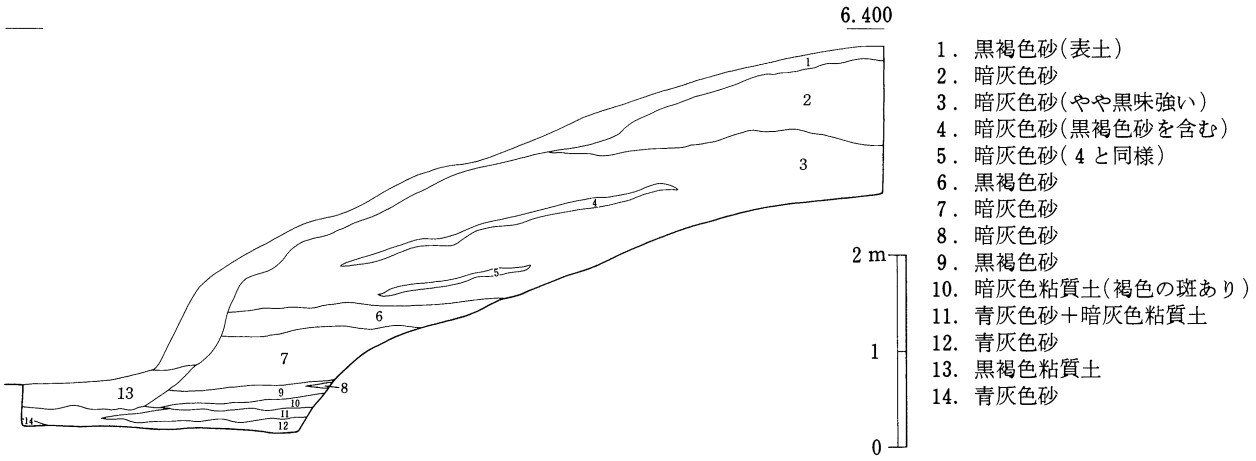


第25図　6号塚全体図

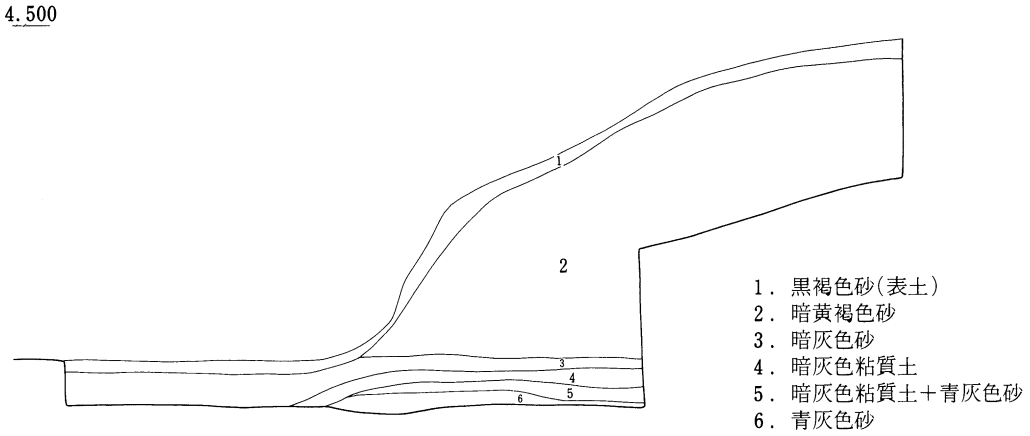


第26図　6号塚第1トレンチ西壁実測図

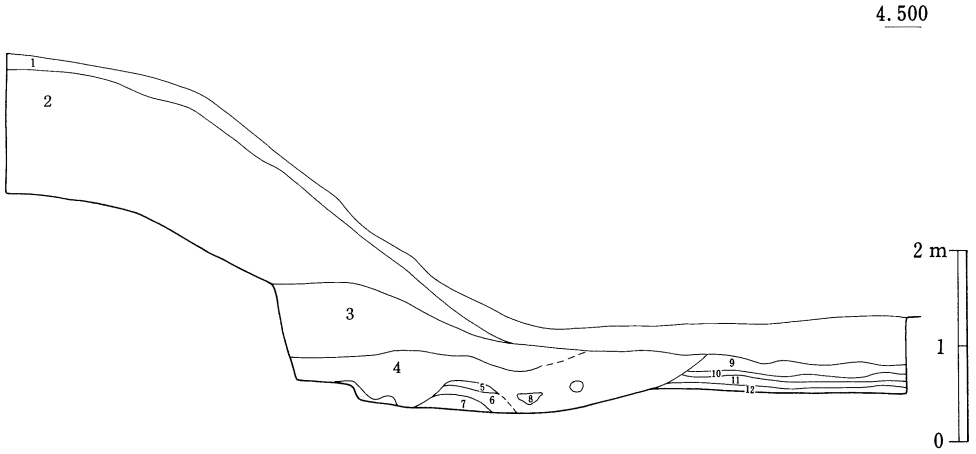
1．黒褐色砂(表土)
2．暗灰色砂
3．暗灰色砂
4．暗灰色砂＋黒褐色砂
5．黒褐色砂
6．暗灰色砂
7．黒褐色砂
8．暗灰色砂
9．黒褐色砂
10．暗灰色粘質土(褐色の斑あり)
11．暗褐色砂
12．青灰色砂(粒径やや大)
13．青灰色砂
14．黒褐色粘質土
15．暗褐色砂



第27図　6号塚第3トレンチ西壁実測図

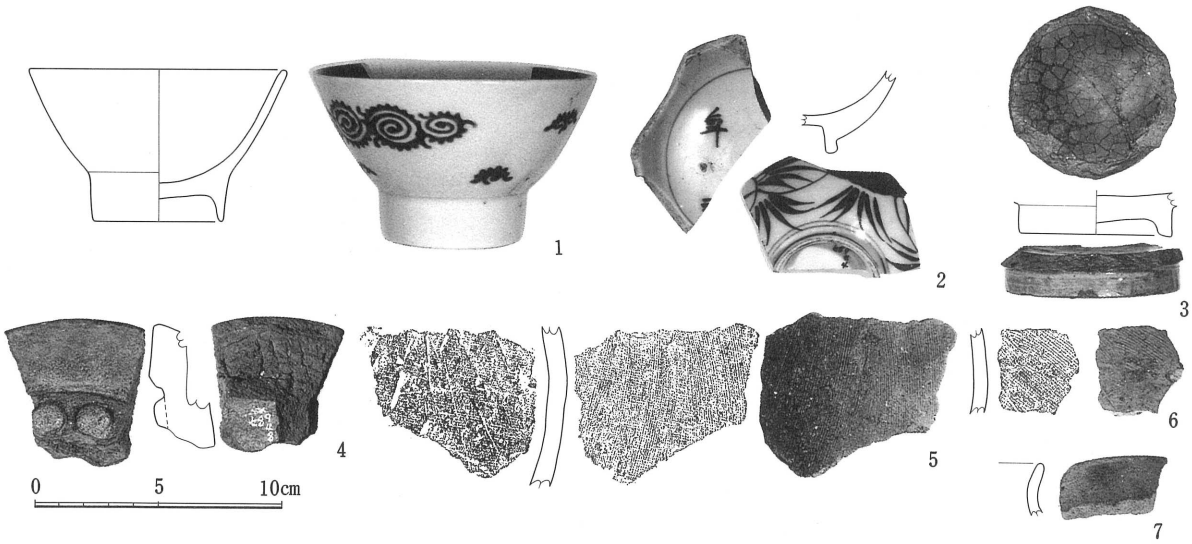


第28図　6号塚第4トレンチ北壁実測図



第29図　6号塚第2トレンチ北壁実測図

1．暗褐色土
2．暗黄褐色砂
3．黒色砂
4．暗灰色粘質砂
5．暗灰色砂
6．暗灰色粘質土
7．暗褐色砂(粗)
8．青灰色砂(しまり良い)
9．暗黄褐色粘質土(シルト?暗灰色の斑あり)
10．暗灰色砂(やや粗)
11．暗黄褐色シルト
12．暗灰色砂



第30図　6号塚出土遺物

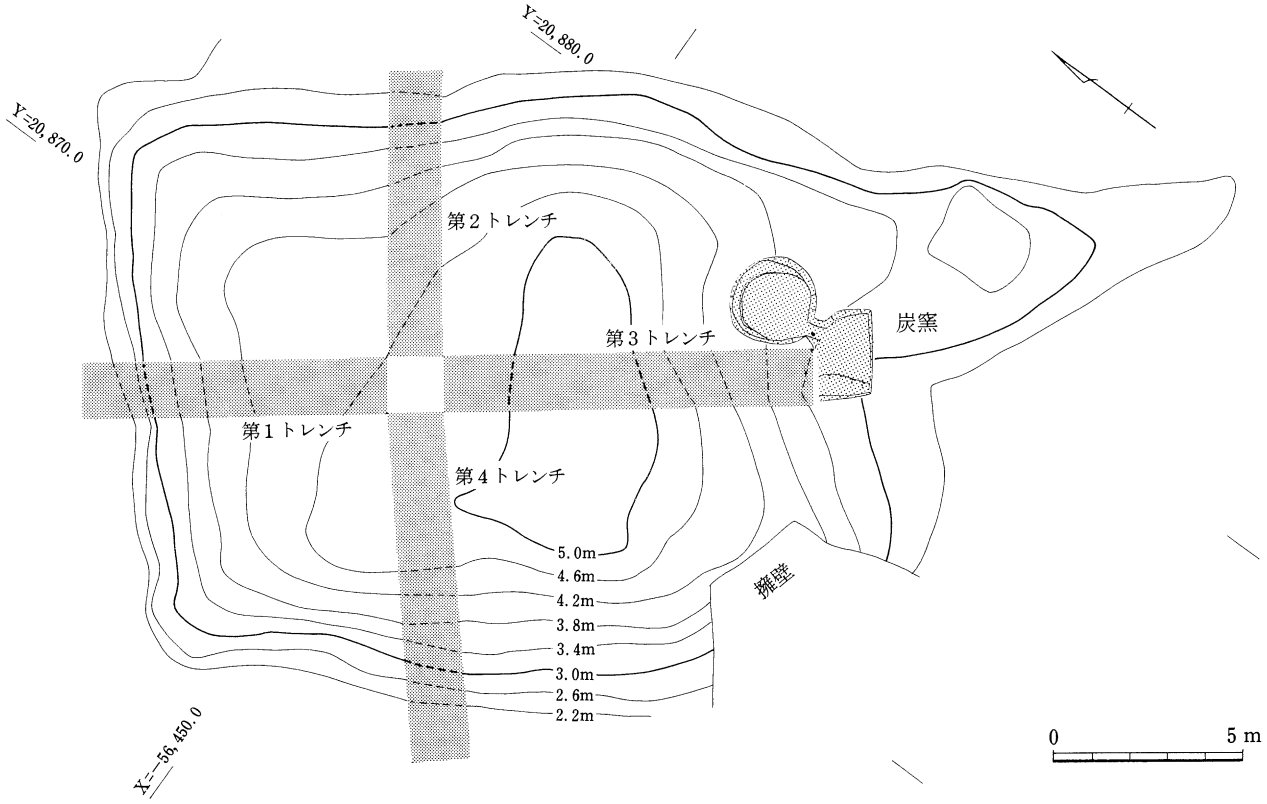
第7表　6号塚出土遺物観察表

No.	種類	器種	部位	法量・形態の特徴	技　法	胎　土	色調 外面	色調 断面	色調 内面	備　考
1	磁器	碗	完形	高台付(広東碗)	蛸唐草文	精良	明褐灰 10GY 8/1	灰白 10Y 8/1	明褐灰 10GY 8/1	
2	磁器	碗			内面に重ね焼の痕跡あり	精良	灰白 N81	同左	同左	「年□」銘あり
3	陶器	底		高台径(6.2)高台はほぼ直立する	全面に施釉釉面は粗い貫入、底部外面はやや凸	精良	灰白 7.5Y 7/1	黄灰 2.5Y 6/1	オリーブ黄 7.5Y 6/3	高台接地部も施釉
4	瓦				裏面剥離部に刻みがある	砂っぽい	青灰 5B 5/1	同左	同左	
5	土師	カメ	胴		外面斜方向のハケ内面横方向のケズリ	小礫、赤色粒子を含む	にぶい褐 7.5YR 6/3	同右	にぶい褐 7.5YR 7/3	
6	土師	カメ	胴		外面横方向のハケ内面ナデ	砂粒多く含む	灰褐 7.5YR 6/2	赤 10R 5/6	にぶい褐 7.5YR 6/3	
7	土師	カメ	口縁	口縁はゆるいカーブを描きながら外反する	内外面とも横方向ナデ	砂粒を多く含む	明褐灰 7.5YR 7/2	にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい 7.5YR 5/3	

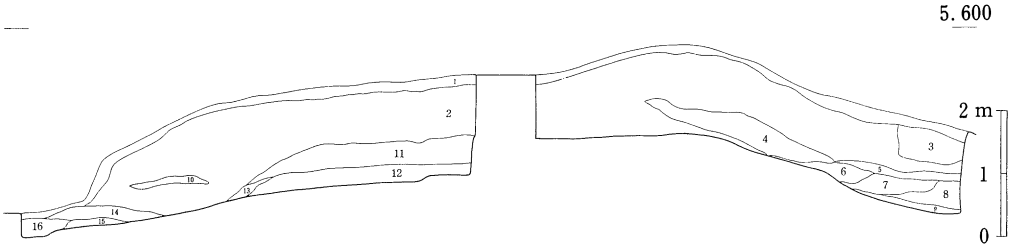
7）7号塚

一辺約20メートルの方形を呈する。南東隅から南側に舌状に延びた部分がある。トレンチは十字に設定した。ほぼ単一の砂で構成されている。南トレンチの南端に炭窯の構築材と思われる、灰赤色を呈した部分が確認されたため、東側を拡張して、炭窯の調査も併せて行った。この炭窯については後に述べることとする。

遺物は図示したようなものが出土している。奈良・平安時代の所産と思われる土師器が出土している。体部に斜格子暗文のあるものも認められた。他に、ハケメを有するもの、いわゆるロクロ土師器、蛸唐草文を有する磁器が出土している。

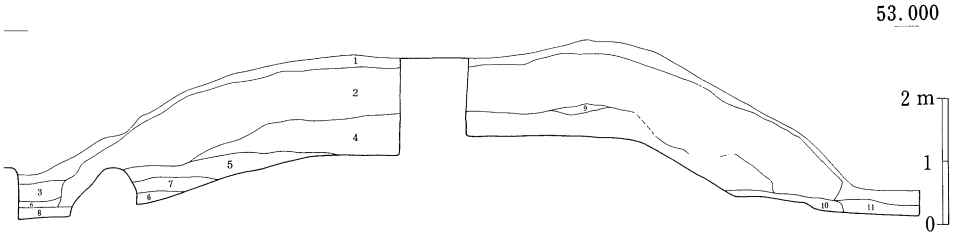


第31図　7号塚全体図



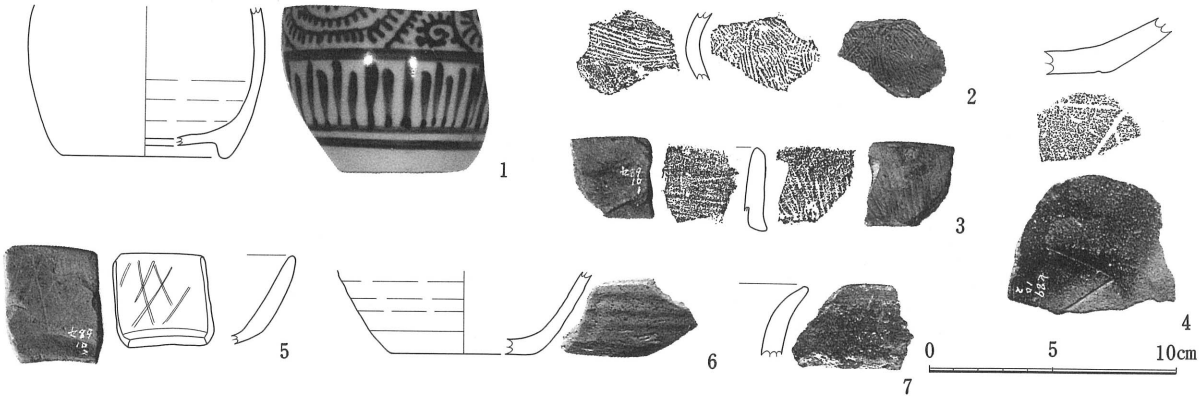
第32図　7号塚第1・第3トレンチ東壁実測図

1．黒褐色砂　表土
2．暗黄褐色砂
3．暗赤褐色　炭窯の構築材
4．暗黄褐色　細礫をわずかながら一様に含む
5．暗褐色砂(粒径小)褐色味やや強い
6．暗褐色砂　粒径やや小、やや粘質若干しまりあり
7．暗褐色砂
8．暗黄褐色砂(やや粒径大)　7より褐色味弱い
9．暗黄灰色砂　水分多く含む
10．暗黄褐色砂　粒径大
11．暗黄褐色砂(やや白っぽい)粒径大きい、しまり悪い
12．暗褐色砂　粒子細かい、しまった観
13．暗灰褐色砂　粒子やや小
14．暗灰色砂
15．暗灰色砂　青色の斑あり
16．暗褐色粘質土　黒味強い、褐色の斑あり



1．黒色砂
2．暗黄褐色砂(しまりやや悪い)
3．暗青色　粘質土
4．暗褐色砂(ややしまりあり)
5．暗黄褐色砂(しまりあり)粒径やや大
6．暗灰色粘質土　褐色の斑あり
7．暗灰色砂．粒径大
8．暗青灰色砂水分多く含む
9．灰色砂　粒径大　ややしまり悪い
10．暗灰色砂　水分多い
11．暗灰色粘質土

第33図　7号塚第2・第4トレンチ南壁実測図



第34図　7号塚出土遺物

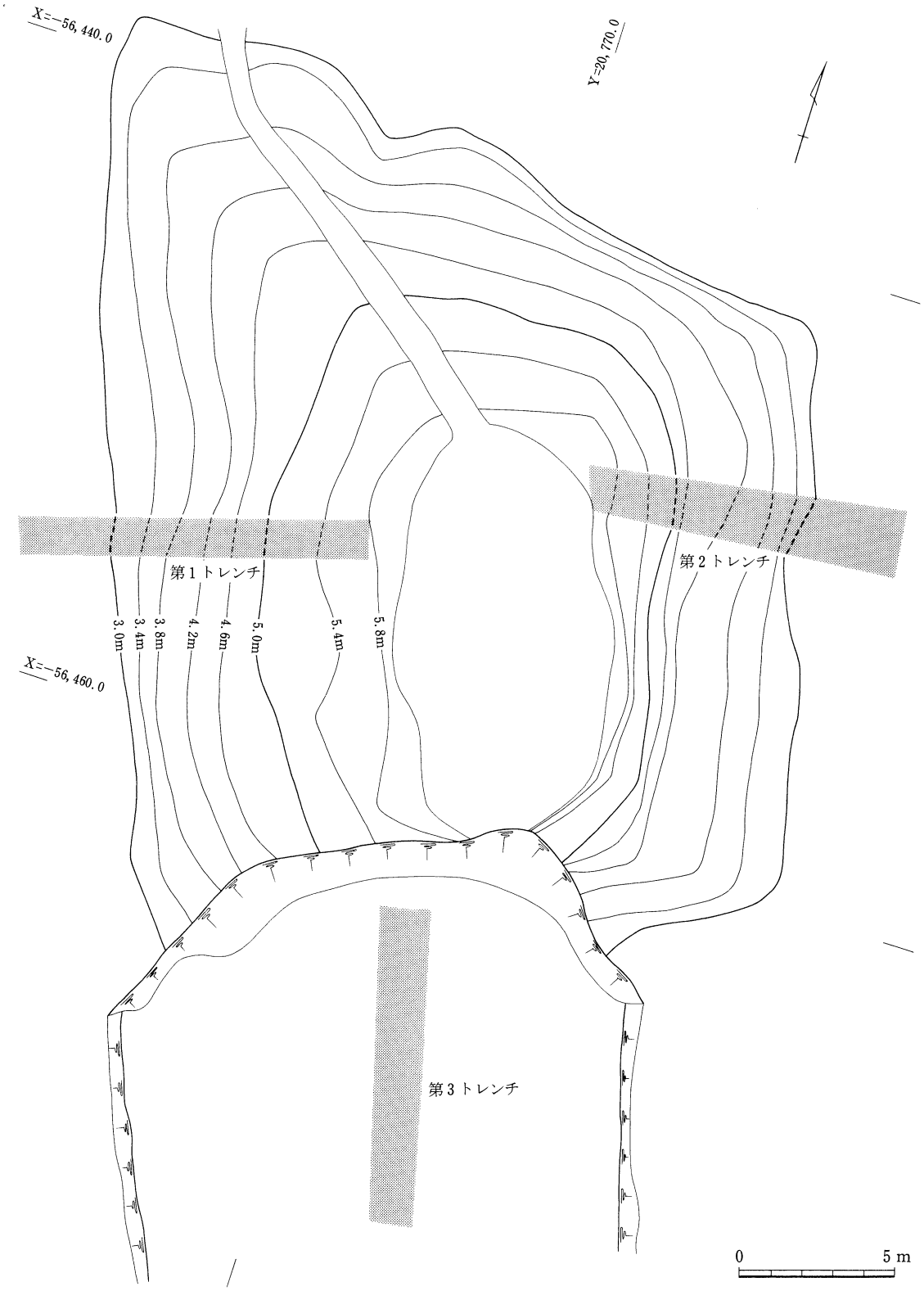
第8表　7号塚出土遺物観察表

No.	種類	器種	部位	法量・形態の特徴	技　法	胎　土	色調 外面	色調 断面	色調 内面	備　考
1	磁器			6.8 胴部外面がそのままゆるやかなカーブを描いて、高台となる	高台接地部は無釉砂付着		明緑灰 10 YR 8 / 1	灰白色 10 YR 8 / 1	灰白色 7.5 YR 8 / 1	蛸唐草文
2	土師	カメ	頸		外面は斜方向のハケ 内面上半は横位のハケ 下半はナデ	砂粒多く含む	にぶい褐 7.5 YR 6 / 3	褐灰 10 YR 6 / 1	褐灰 10 YR 4 / 1	
3	土師	カメ	口縁	口縁ほぼ直立する	外面タテ方向のハケ、 内面横位のナデ	赤色粒子砂粒を含む	にぶい褐 7.5 YR 5 / 3	同左	同左	胴部との接合部から剥離明瞭
4	土師	カメ	底部		外面胴部は斜方向のハケ、底部は木の葉底内面、不整方向のケズリ	砂粒を含む	にぶい褐 7.5 Y R 6 / 3	同左	同左	外面底部から胴部にかけて黒斑あり
5	土師	坏		体部は外方へ開さって口縁部下でわずかに直立気味になる	体部外面下半は手持ちへらケズリ、口縁下は横位のナデ、内面は斜格子暗文、底部と体部の境界明瞭	赤色粒子をわずかに含む	にぶい橙 7.5Y 7 / 3	橙 5 YR 6 / 6	橙 5 YR 6 / 6	
6	土師	椀		5.6 体部はやや内湾気味に外方へ開く	ヨコナデののち、底部外周を手持ちへラケズリ底部は切り離しののち手持ちへラケズリ	砂粒を多く含む	にぶい橙 7.5Y 7 / 4	同左	同左	
7	土師	カメ	口縁	口縁はゆるいカーブを描きながら外反する	内外面とも横位ナデ	石礫をわずかに含む	同右	褐灰 5 YR 4 / 1	黒褐 5 YR 3 / 1	

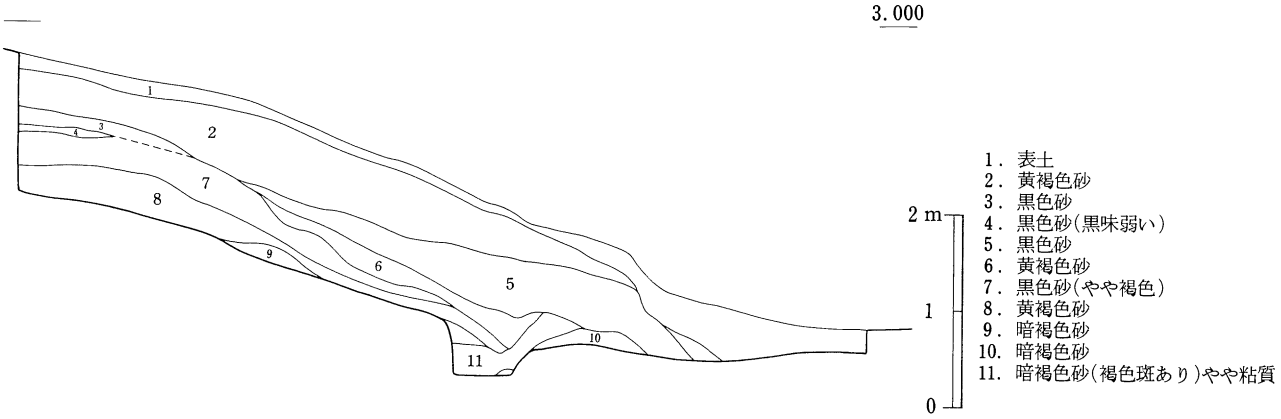
8）8号塚

不整形で、頂部には、墓地が営まれていた。図示したように、三方向にトレンチを設定した。なお、南側については、土取りにより欠失しており、勾配が急であったため、裾部から南の平坦部の方向にトレンチを長めに設定した。西トレンチの下層からは黒色砂のブロックが検出された。

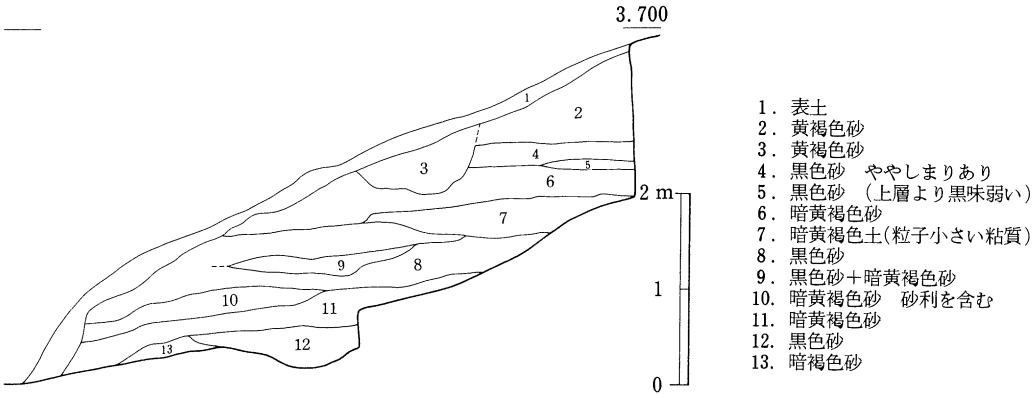
遺物は、土師器のほかに陶器類が出土している。灯明皿等は墓地に関係する遺物であろう。


X=−56,440.0
Y=20,770.0
第1トレンチ
第2トレンチ
第3トレンチ
3.0m
3.4m
3.8m
4.2m
4.6m
5.0m
5.4m
5.8m
X=−56,460.0
0
5 m

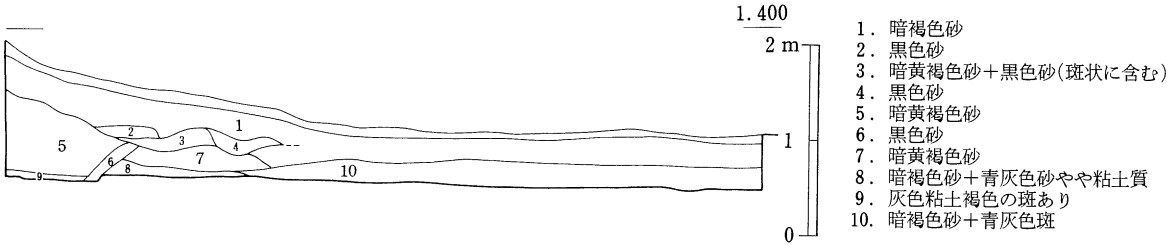
第35図　8号塚全体図



第36図　8号塚第1トレンチ北壁実測図



第37図　8号塚第2トレンチ北壁実測図

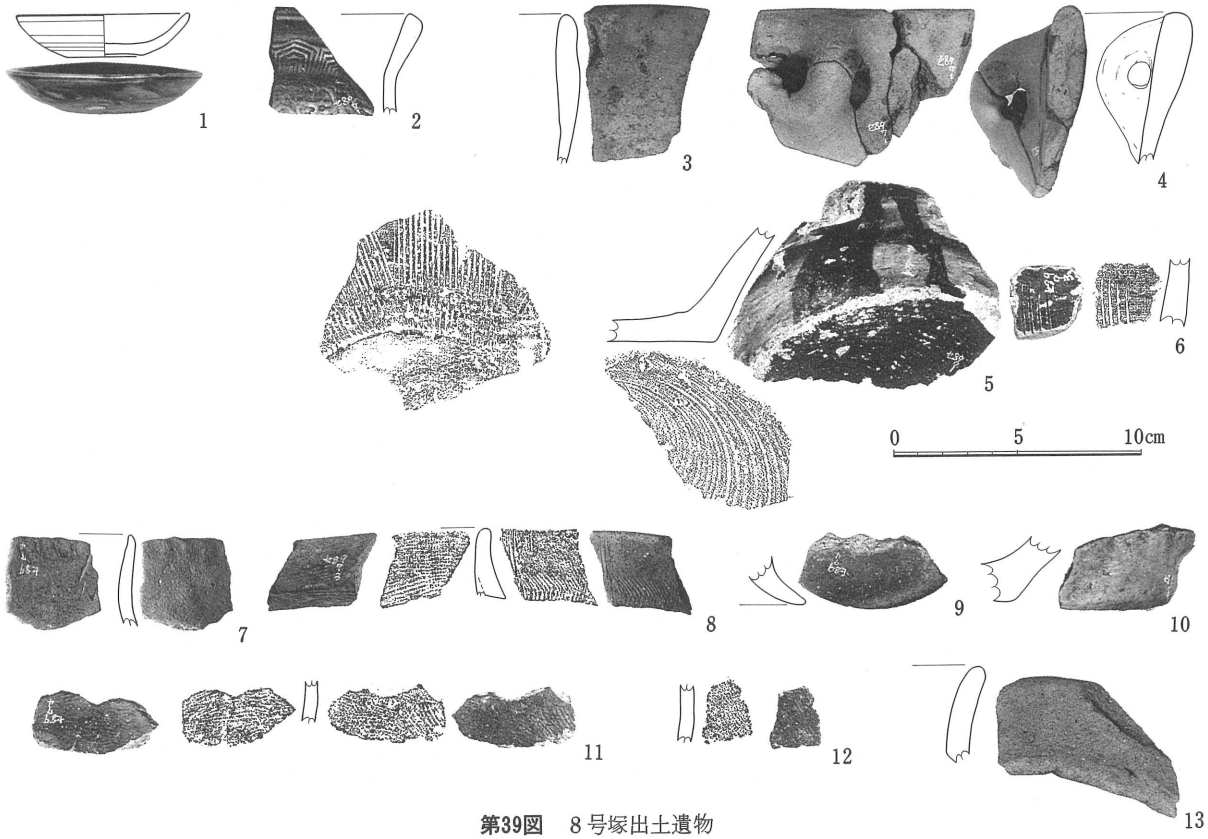


第38図　8号塚第3トレンチ北壁実測図

第9表　8号塚出土遺物観察表

No.	種類	器種	部位	法量･形態の特徴	技　法	胎　土	色調			備　考
							外面	断面	内面	
1	陶器	小皿		1.7　7.0　3.0	内面全面褐釉施釉外面口縁付近にも及ぶ内外面共に重ね焼の痕跡あり	精良	灰黄色 2.5Y 7/2	灰黄 2.5Y 7/3	褐色 10YR 4/6	
2	陶器	鉢	口縁	口縁は「く」字状を呈し屈曲して外方へ聞く	陰刻ののち白色釉を施釉、内面全面外面は口縁から屈曲部直下まで	精良	灰赤 2.5YR 4/2	にぶい橙 2.5YR 6/4	灰赤 2.5YR 5/2	

3	土鍋			体部は比較的薄く口縁部は肥厚し直立する	内面全面ヨコナデ、外面は口縁直下はヨコナデそれ以下は粗い平形	雲母赤色粒子を含む	同左	同右	にぶい褐 7.5 YR 6/3	
4	内耳			体部から口縁部にかけて、わずかに外反しながら開く	口縁直下外面は横位ナデ、それより下方は不明瞭取り付けは丁寧	雲母粒を多く含む	赤黒 10 YR 2/1	赤黒褐色 5 YR 5/6	にぶい橙色 7.5 YR 6/4	
5	陶器	すり鉢		底径(16cm)体部は直線的に開く内部、底部と体部の境界は明瞭	体部外面は横ナデ体部、底部ともに条線あり、底部回転糸切り無調整、釉は全面	長石粒を顕著に含む	暗赤灰色 10R 3/1	灰白色 7.5Y 8/1	黒褐色 5 YR 3/1	条線は20本1単位底面磨耗著しい
6	陶器	すり鉢			内外面共にヨコナデのち褐釉	小礫を含む	極暗赤褐 2.5 YR 2/2	灰黄 2.5Y 7/2	極暗赤褐 2.5 YR 2/4	
7	土師	カメ	口縁	口縁は強い押圧による液状	口縁内面工具による押圧痕	砂粒多く含む	にぶい橙 5 YR 6/4	にぶい橙 7.5 YR 7/3	同左	
8	土師	カメ	口縁	口縁部はわずかに外反する	外面たて方向、内面横方向のハケ、剥離した胴部との接合面に横方のハケ	砂粒多く含む	にぶい橙 7.5 YR 6/4	褐灰 10 YR 6/1	にぶい橙 7.5 YR 6/4	
9	土師	高坏	脚			砂粒を多く含む	にぶい赤褐 2.5 YR 5/4	明褐灰 5 YR 7/1	橙 2.5 YR 6/6	内面接施部に黒斑あり
10	土師	カメ	底		外面横方向のケズリ	黒色粒子を多く含む	にぶい黄橙 10 YR 7/2	にぶい橙 5 YR 7/4 灰N51	にぶい褐 7.5 YR 5/3	
11	土師	カメ	胴		外面斜方向のハケ内面横方のハケ	赤色粒子、砂粒を含む	黒 10 YR 2/1	にぶい橙 5 YR 6/3	にぶい赤褐 5 YR 5/3	
12	土師	カメ	胴		外面ハケ 内面不明瞭	砂粒多く含む	暗褐 7.5 YR 3/3	にぶい橙 7.5 YR 6/4	同左	
13	土師	カメ	口縁	口縁はよく直線的に外方に開く	不明瞭	砂粒を多く含む	にぶい橙 5 YR 6/4	同左	橙 2.5 YR 6/6	

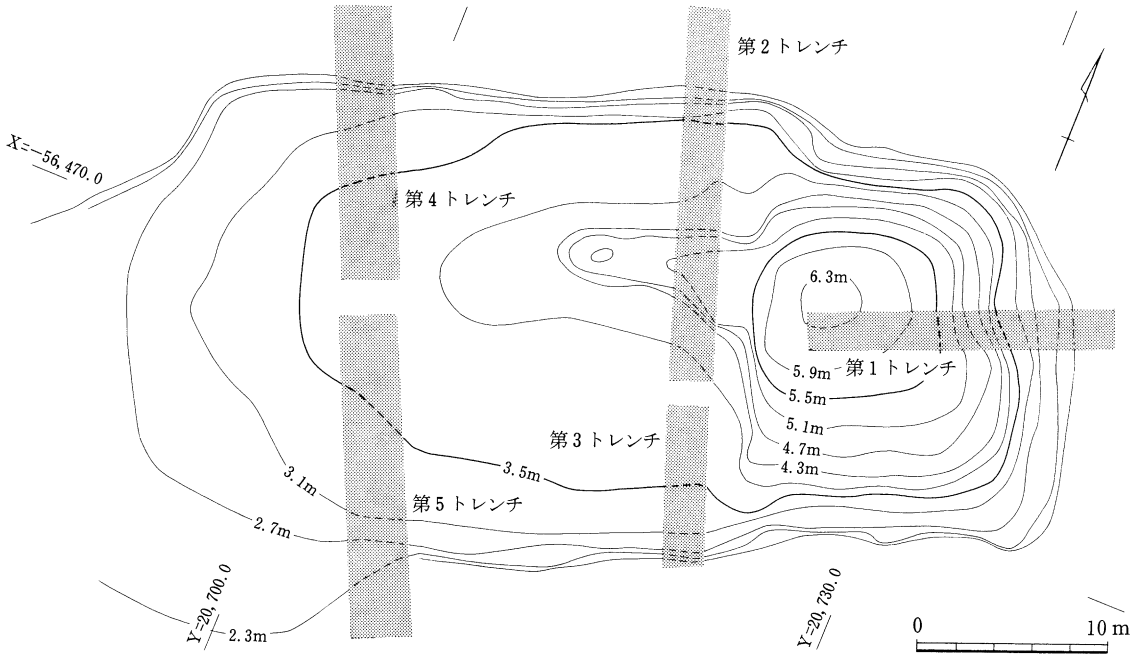


第39図　8号塚出土遺物

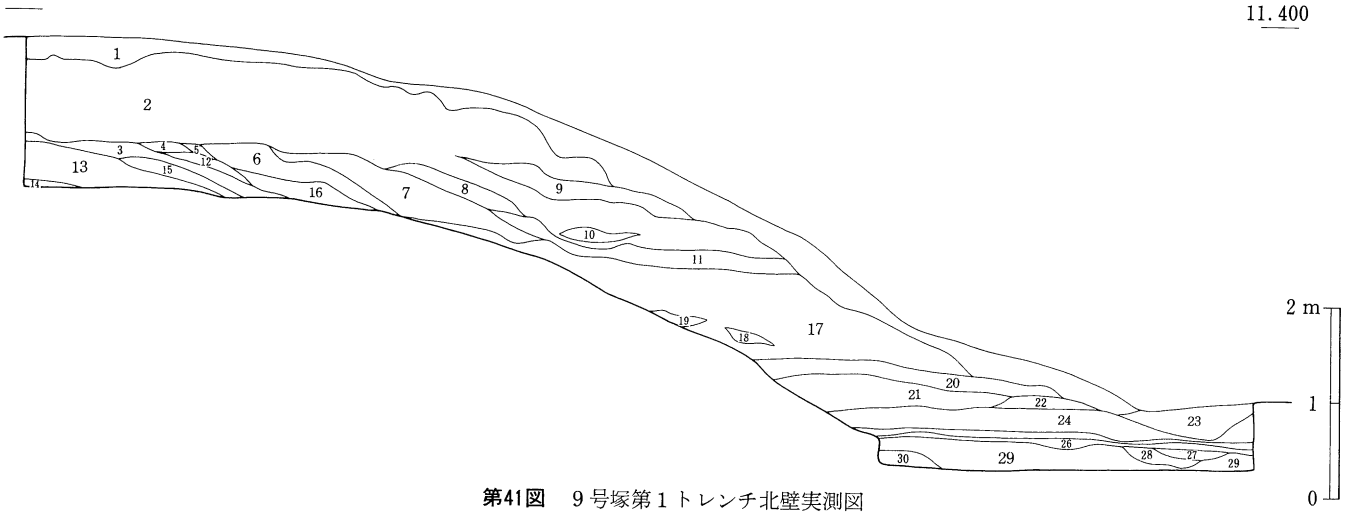
9）9号塚

今回の調査の中で、最大規模のものである。東西約40メートル、南北約25メートルで、東半部分は一段高く、平面的には鍵穴状を呈している。南西隅付近は平坦部となり、特に境界としうる段差等の存在は認められなかった。トレンチは、南北方向に二本と、東側に一本設定した。砂により構成されている点は他と同様であるが、下位に行くにしたがって暗灰色の砂と灰色の砂の互層が見られるようになった。さらに下層には青みを帯びたグライ化した砂層があり、砂利、粘土、円礫を多く含む層も検出された。この層付近で多くの遺物が出土した。また、図示し得なかったが、木片も出土している。

図示したように、遺物の出土は比較的多い。土師器は、下層からの出土がほとんどであり、陶磁器類は、上層からの出土が多い。



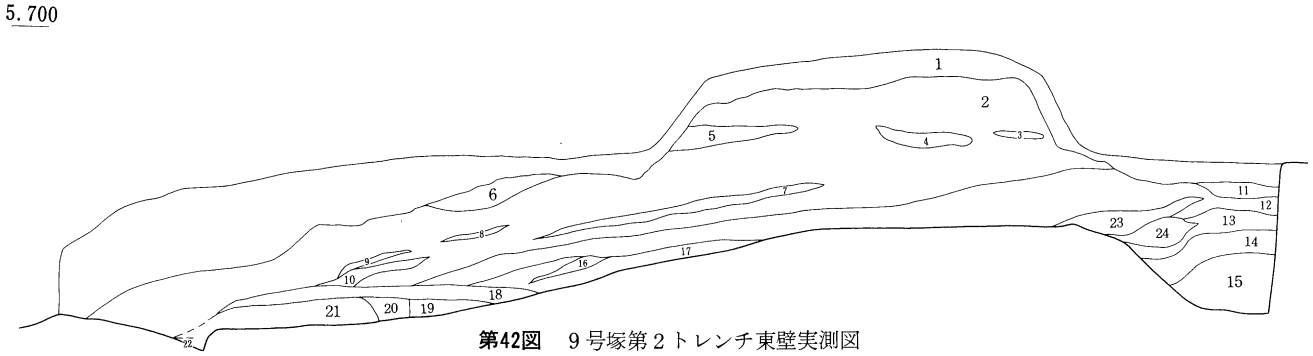
第40図　9号塚全体図



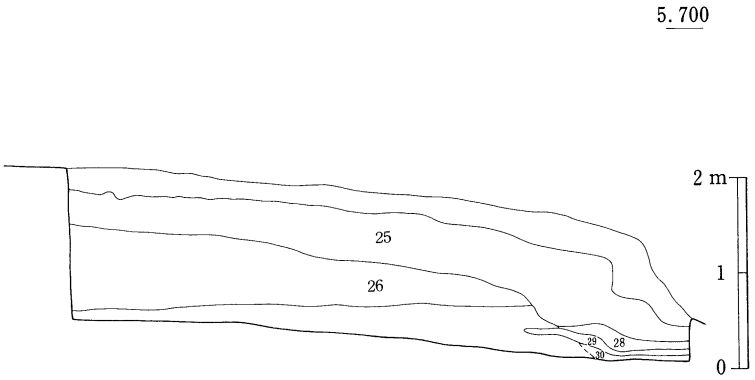
第41図　9号塚第1トレンチ北壁実測図

第1トレンチ

1．表層砂(やや黒い)
2．灰褐色砂
3．黒色砂(やや褐色)
4．粘土ブロック含む(やや黒強い)
5．灰褐色
6．褐色やや強い
7．黒色砂(黒やや強い)
8．黒やや弱い
9．黒色砂
10．黒色砂(黒味やや弱い)
11．黒色土
12．黒色砂(粘土ブロック含む)
13．灰褐色砂
14．黒色砂
15．黒色砂(黒やや強い)粘土ブロック含む
16．黒味強い
17．灰褐色砂
18．黒色砂(黒味やや弱い)
19．黒色砂
20．黒色砂
21．灰褐砂
22．灰褐砂＋灰色斑
23．暗灰色粘質土(やや青)
24．灰色シルト(?)斑顕著
25．青灰色砂
26．灰色粘土
27．暗青灰色砂＋鉄分
28．鉄分の酸化が顕著な砂(粗い)
29．暗灰色砂層(やや粗粒)
30．灰色粘質



第42図　9号塚第2トレンチ東壁実測図



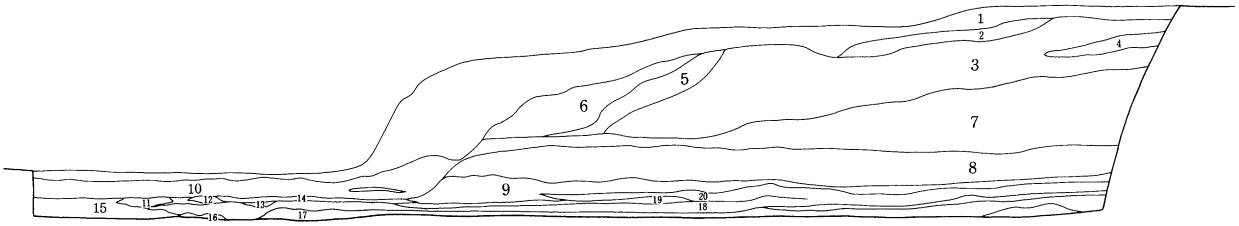
第43図　9号塚第3トレンチ北壁実測図

1．表層砂(根のカクラン多い)
2．灰褐色砂
3．粘土ブロック含む
4．粘土ブロック
5．黒色砂
6．黒色砂
7．黒色砂
8．黒色砂
9．黒色砂
10．黒色砂
11．灰褐色砂
12．黒色砂
13．灰褐色砂
14．黒色砂
15．暗灰色砂
16．黒色砂
17．灰褐色砂
18．黒色砂
19．灰褐色砂
20．暗褐色砂
21．灰褐色砂
22．灰褐色砂(斑顕著)
23．灰褐色砂(粘土ブロック含む)
24．暗褐色砂
25．灰褐色砂
26．黒色砂(木炭片含む)
27．灰褐色砂(灰色の斑顕著)灰色強い
28．暗灰色粘質土(キサゴをわずかに含む)
29．青灰色シルト
30．青灰色砂(グライ化)

第4・第5トレンチ

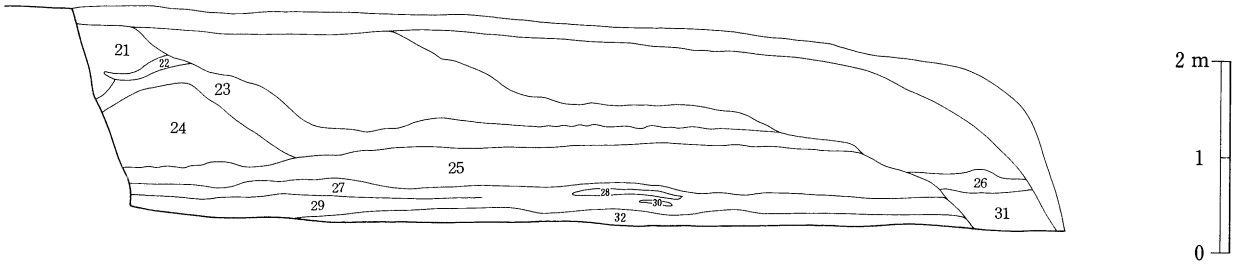
1．暗褐色土
2．粘土ブロック含む　灰褐色砂
3．灰褐色砂
4．黒色砂
5．黒色砂
6．灰褐色砂
7．黒色砂
8．灰褐色砂(斑著)
9．灰色粘質土(褐色の斑顕著)
10．暗灰色粘質土　貝(イボキサゴ含む)
11．やや褐色青味の砂
12．鉄分の沈澱している砂
13．鉄分の沈澱している砂
14．青灰色(砂土シルト)
15．青灰色砂
16．褐色砂(砂利が顕著)
17．褐色味の砂
18．褐色砂
19．暗灰色粘質土
20．暗灰色砂
21．灰褐色砂
22．黒色砂
23．黒色砂
24．暗褐砂
25．灰暗色砂
26．暗灰色粘
27．灰色砂土シルト
28．灰色砂
29．灰暗色砂
30．灰暗色砂＋粘土
31．暗灰褐色土(キサゴ含む)
32．暗灰色砂

4.100



第44図　9号塚第4トレンチ北壁実測図

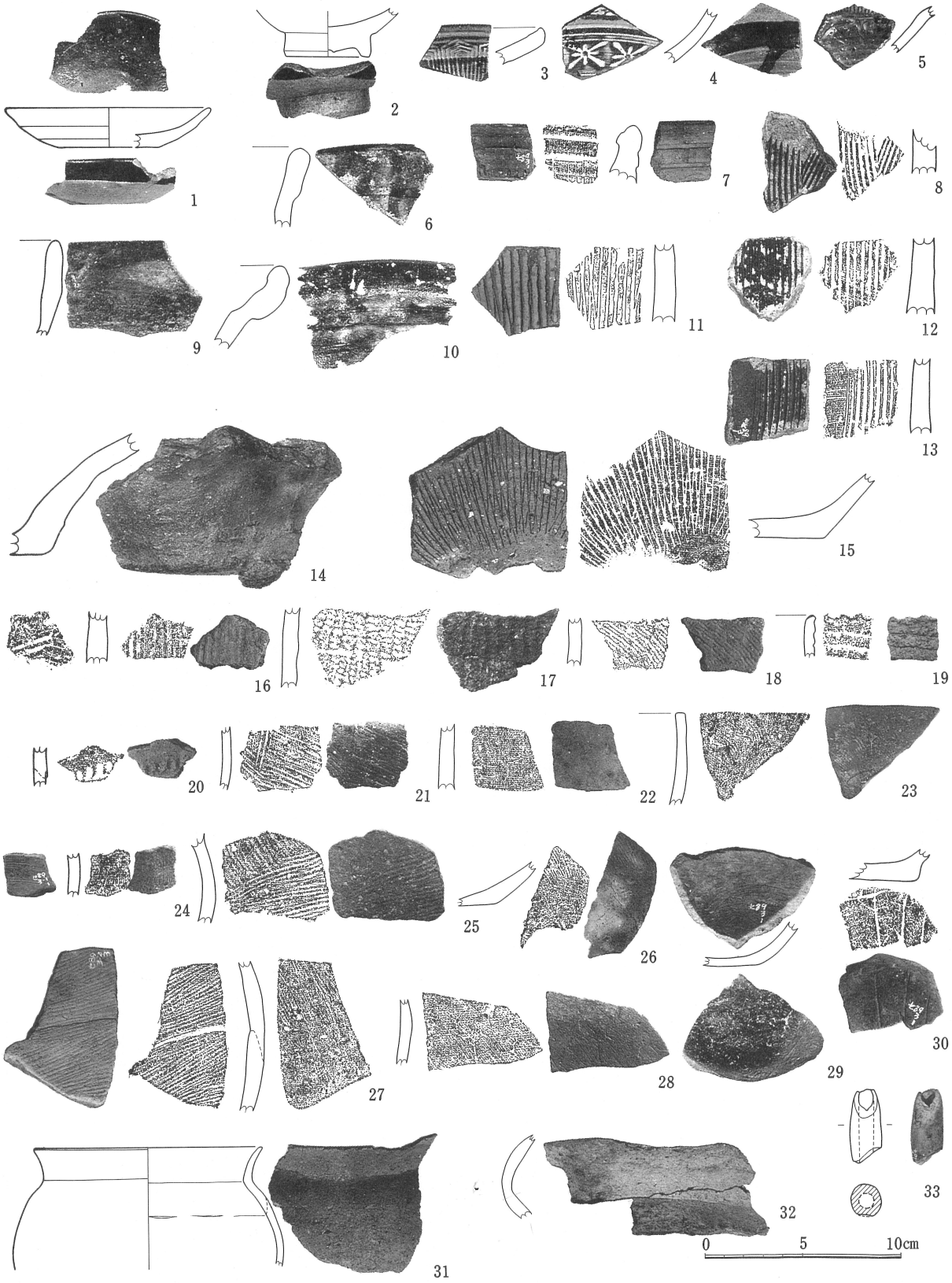
4.100



第45図　9号塚第5トレンチ北壁実測図

第10表　9号塚出土遺物観察表

No.	種類	器種	部位	法量・形態の特徴	技　法	胎　土	色調 外面	色調 断面	色調 内面	備　考
1	陶器	灯明皿		器高(2.0)口径(10.6)底径(5.2)体部外面の稜明瞭	外面施釉部以下へラケズリ、内面全面及び外面口縁下に鉄釉施釉	砂粒が多く含む	暗赤褐 10R 3/3 黄灰 2.5Y 6/1	灰白 5Y 7/1	極暗赤褐 2.5YR 2/4	
2	陶器	不明		高台部は器厚が厚い	内面は透明釉、外面は高台外周まで緑釉外面底部中央に工具痕	精良	黄灰 2.5Y 6/1	灰黄 2.5Y 7/2	灰白色 5Y 7/1	
3	陶器	鉢	白土象嵌	口縁部はわずかに直立する		精良	暗灰黄 2.5Y 5/2	灰黄褐色 10YR 6/2	白土部 灰白色 2.5Y 8/1 地 暗灰色 2.5Y 5/2	
4	陶器	鉢?	白土象嵌		外面透明釉ののち横位の鉄釉	精良	灰褐 7.5YR 5/2	にぶい褐 7.5YR 6/3	灰黄褐色 10YR 5/2	
5	陶器	皿	白土象嵌	端部でわずかに外方へ屈曲する	内面は貫入あり	精良	灰赤色 2.5YR 4/2	明赤褐色 2.5YR 5/8	灰赤色 2.5YR 5/2	
6	陶器	鉢		口縁はわずかに屈曲して直線的に外方へ開く	褐釉を全面に施すまだら状を呈す	黒色粒子多く含む	暗赤褐 5YR 3/3	にぶい橙 10YR 6/3	暗赤褐 YR 3/3	
7	陶器	すり鉢		内面口唇部直下突帯あり外面に条線2本	内外面ともに横ナデ(内面は条線を刻むのが先行そののちヨコナデ)	小礫を含む	赤褐 5YR 4/6	明赤褐 2.5YR 5/6	極暗赤褐 2.5YR 2/3	断面の色調はサンドイッチ状
8	陶器	すり鉢			内外面に褐釉(外面うすい)条線7＋α	小礫含む	赤褐 5YR 4/6	灰白 2.5Y 8/2	極暗赤褐 2.5YR 2/4	使用による磨耗が認められる
9	土鍋			体部は比較的薄く口縁部は肥厚し直立する	内面全面ヨコナデ外面口縁下はヨコナデそれ以下は粗い整形	雲母を粒子が含む	灰褐 5YR 4/2	同右	にぶい褐 7.5YR 6/3	



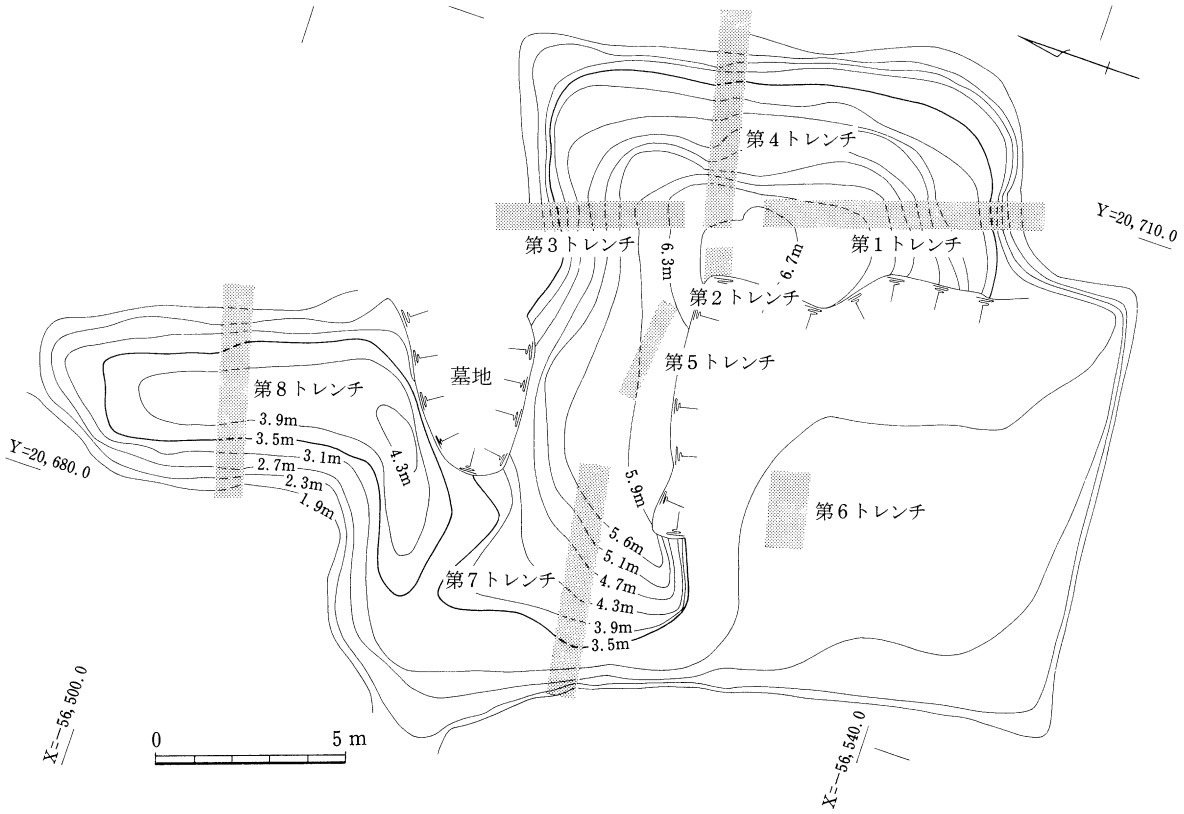
第46図　9号塚出土遺物

10	陶器	カメ	口縁	口縁は直線的に開いたのち、浅い凸状を呈する。口縁部は肥厚する	ヨコナデ、内外面共に鉄釉ムラがある	小礫、黒色粒をわずかに含む	極暗赤褐色 7.5R 2/2	灰白色 10Y 8/1	極暗赤褐色 2.5YR 2/4	断面中心部はやや赤味強い
11	陶器	すり鉢			内外面ともヨコナデののち褐釉、条線8	白っぽい粒子を多く含む	灰赤 2.5YR 6/2	灰赤 10R 4/2	にぶい赤褐 2.5YR 5/3	
12	陶器	すり鉢			内外面ともに黒色釉条線は10＋α	砂粒含む	黒 10YR 1.7/1 わずかに暗褐 7.5YR 3/4 あり	褐灰 10YR 6/1	外面に同じ	
13	陶器	すり鉢			内外面ともにヨコナデ 内外面に褐釉 条線10＋α	わずかに小礫を含む	にぶい赤褐 2.5YR 4/3	にぶい黄橙 10YR 7/2	外面に同じ	
14	無釉	鉢		体部は外反しながら開く、体部外面は凹凸顕著光沢あり	体部外面は横位のケズリ	細礫、砂粒を多く含む	暗赤灰色 10R 4/1	赤 10R 5/6	灰赤色 7.5R 5/2	内面磨耗底部外面に窯壁付着
15	炻器	すり鉢		体部は直線的に開く内面は底部から体部にかけてゆるやか	体部外面はヨコナデ底部外面は手持ちヘラケズリ	小礫を多く含む	橙色 2.5YR 6/6	同左	同左	条線は9本1単位内面は磨耗、単位毎の重複は顕著
16	縄文				外面条痕 内面条痕	繊維を含む	明赤褐 2.5YR 5/6	黒褐 5YR 3/1	黒褐 5YR 3/1	
17	縄文				外面、全面に縄文	繊維を含む 小礫を含む	黒 5YR 1.7/1	黒 7.5YR 1.7/1	にぶい褐 7.5YR 5/3	
18	弥生	壺	胴		外面結節＋単節文施文	砂粒 白色粒を多く含む	にぶい橙 7.5YR 7/3	同左	にぶい黄橙 10YR 7/2	
19	弥生	カメ	口縁	輪積み痕を残し口唇部に刻みを施す	不明瞭	砂粒を顕著に含む	にぶい橙 7.5YR 7/3	同左	同左	
20	弥生	カメ	頭		胴部と頭部の境界に輪積痕残し刻みを施す	砂粒を多く含む	明褐灰 7.5YR 7/2	褐灰 10YR 4/1	明褐灰 7.5YR 7/2	
21	土師	カメ	胴		外面斜方向のハケ内面ミガキ	小礫わずかに含む	にぶい赤褐 2.5YR 4/3	明赤褐 2.5YR 5/6	にぶい赤褐 2.5YR 5/4	外面黒斑あり
22	土師	カメ	胴		外面たて方向の細かいハケ目	小礫をわずかに含む	にぶい褐 7.5YR 6/3	同左	同左	
23	土師		口縁	口唇部は平坦	外面　斜方向のハケ 内面　横方向のケズリ	赤色粒子を含む	にぶい赤褐 5YR 5/3	褐灰赤 7.5YR 5/1 10R 5/6	赤 10R 5/6	
24	土師	カメ	胴		外面　たて方向のハケ 内面　横方向のハケ	赤色粒子をわずかに含む	褐灰 75YR 4/1	にぶい橙 5YR 6/3	同左	
25	土師	カメ	胴部上半		外面上半はたて方向のハケ 下半は横方向のハケ 内面は横方向のハケ	黒と粒子含む	にぶい褐 7.5YR 5/3	にぶい橙 5YR 6/4	同左	
26	土師	カメ	底		外面胴部たて方向のハケ、底部ケズリ内面ミガキ	砂粒含む	灰褐 7.5YR 4/2	にぶい橙 7.5YR 7/4	灰褐 7.5YR 6/2	
27	土師	カメ	胴		内面横方向のハケ接合痕を明瞭に残す	砂粒小礫を含む	にぶい橙 7.5YR 7/3	褐灰 10YR 4/1	にぶい橙 7.5YR 7/3	
28	土師	カメ	胴		外面斜方向のハケ 内面斜方向のハケ	赤色粒子をわずかに含む	灰褐 5YR 4/2	にぶい赤褐 5YR 5/4	褐灰 7.5YR 4/1	

29	土師	碗		底部は凹凸多い	内面は粗いミガキ外面は横位のケズリ、底部は不整方向のケズリ	小礫をわずかに含む	灰褐 7.5YR 5/2	明褐灰 7.5YR 7/2	にぶい褐 7.5YR 5/4	外面黒斑あり
30	土師	カメ	底		木ノ葉底	砂粒多い	褐灰 7.5YR 5/1	にぶい橙 7.5YR 7/3	褐灰 10YR 4/1	器面は磨耗により角がすくない
31	土師	カメ		口径(11.8)頸部はくの字状を呈し口縁端部はわずかに外半する	内面一口縁部は横位ハケ胴部はやや右下りのケズリ 外面一口縁部は横位のケズリ胴部は右下りのハケののちナデ	小礫、砂粒を顕著に含む	明褐灰色 7.5YR 7/2	にぶい橙 7.5YR 7/3	にぶい黄橙 10YR 7/3	内面に淡い黒斑あり
32	土師	カメ	口縁	頸部から口縁にかけては「く」の字状を呈する	口縁外面は横方向ナデ	橙色粒子を多く含む	にぶい橙 7.5YR 7/3	同左	同左	
33	管状土錘			孔径(0.6cm)		微砂粒子わずかに含む	にぶい赤橙 10R 6/3	淡橙色 5YR 8/3		

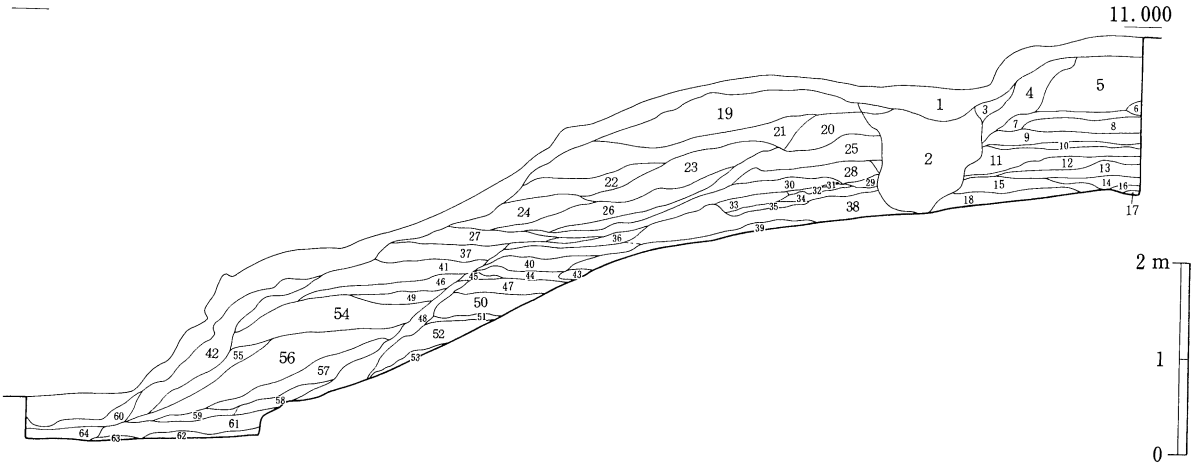
10）10号塚

不整形である。北側に舌状の張り出しがあり、南西側は土取りにより大きく欠失し、平坦となっている。張り出し部と、本体の間には、墓地が営まれていた。トレンチは十字方向および平坦部、舌状部に設定した。舌状部は均質な砂により構成されていたが、本体では、他の塚とは異なった堆積状況が見られた。上層では、粘質のある褐色の土と黒味の強い土が交互に堆積していた。下層になるにしたがって、砂質が顕著になるが、灰色と暗灰色の互層も見られ、この暗灰色の層から寛永通宝が出土している。また、墓地のわきにあったイチョウの移植にかかる作業に際して、蔵骨器が出土した。



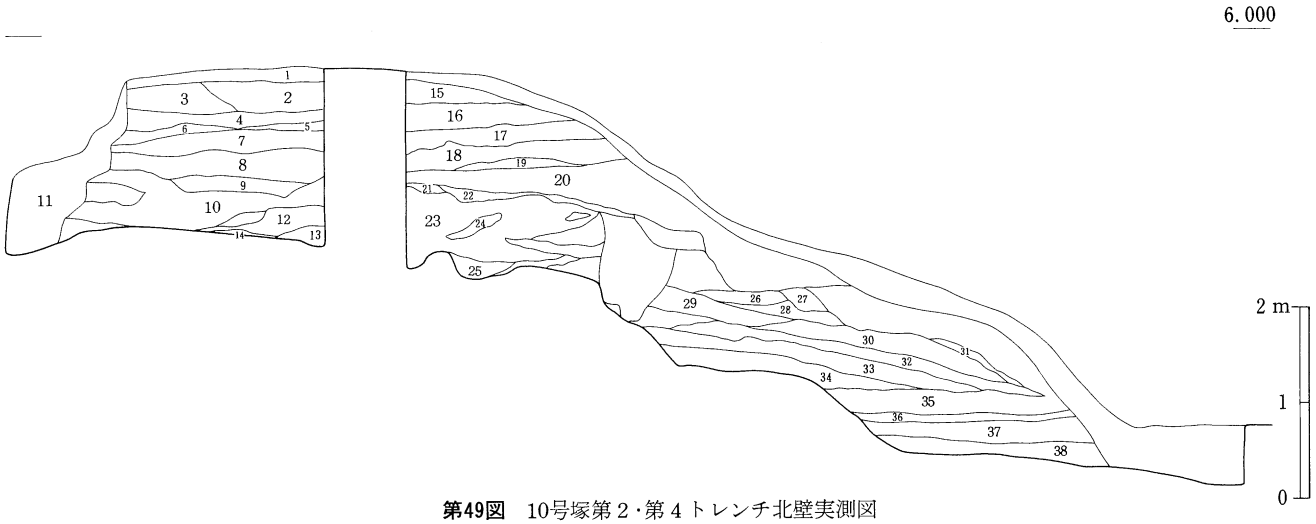
第47図　10号塚全体図

遺物は、土師器、陶器のほかに、管状土錘や、埴輪の破片も出土している。



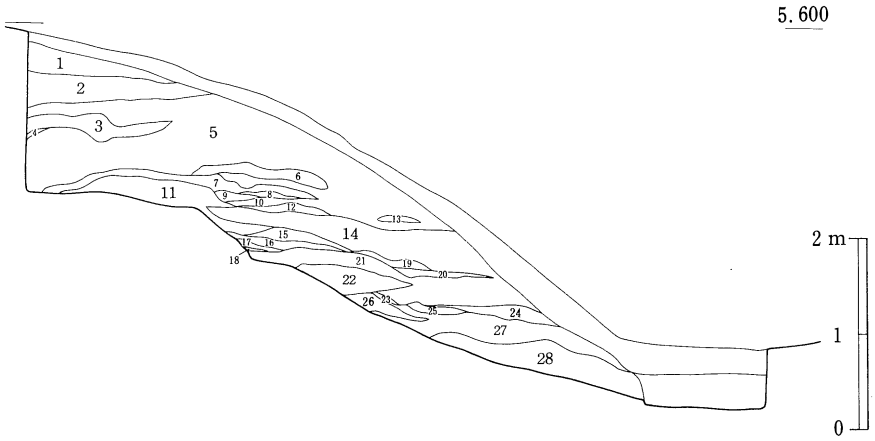
第48図　10号塚第１トレンチ西壁実測図

1．表土(黒色．砂質)
2．攪乱　暗黄褐色土＋黒色土(乱れた感あり)
3．暗褐色砂　黒味強い
4．黒色砂質土
5．暗褐色土(黒味強い暗黄褐色土を含む)
6．暗黄褐色土
7．暗褐色土＋暗黄褐色土
8．黒色土(砂質、粒子細かい　しまりあり)
9．暗褐色砂
10．黒色砂＋暗黄褐色砂
11．暗黄褐色砂＋粘質ブロック
12．黒色土＋暗黄褐色土
13．暗黄褐色砂(粒子粗い)
14．暗褐色(粘質土＋砂)黒味やや強い
15．暗黄褐色砂(粘質土ブロックをわずかに含む)
16．黒色土＋暗黄褐色砂
17．暗黄褐色砂(粒子粗い)
18．暗黄褐色砂(暗褐色土ブロックを含む　砂は粗い)
19．暗褐色砂質土
20．暗黄褐色砂(黒色土ブロックをわずかに含む)
21．暗黄褐色砂　やや粘質
22．黒色土＋暗黄褐色土ブロック
23．黒色土＋暗黄褐色土
24．暗褐色砂　黒色　暗黄褐色ブロックを含む
25．暗黄褐色(砂＋粘質土)＋黒色土ブロック
26．暗黄褐色砂
27．暗黄褐色砂(黒色)
28．暗褐色土(しまりあり、黒褐色土をブロック状に含む)やや粘質
29．暗黄褐色土＋砂
30．黒色砂質土(暗褐色ブロックをわずかに含む)
31．炭化材のうすい層(層厚、厚いところで１cm)
32．暗褐色土＋暗黄褐色土
33．暗黄褐色土＋砂
34．暗黄褐色砂(粒子粗い　しまり悪い)
35．暗黄褐色砂＋黒色土ブロック
36．暗褐色土＋黒色土＋暗黄褐色土
37．黒色砂質土
38．暗黄褐色(砂＋土)＋黒色土ブロック
39．黒色砂質土
40．黒色砂質土(黒味強い)
41．暗黄褐色砂
42．黒色砂質土
43．黒色砂質土
44．黒灰色砂＋黒色土ブロック
45．黒色土
46．暗黄褐色土
47．暗黄褐色土(砂含む)
48．暗黄褐色砂(しまり悪い)
49．暗灰色砂＋黒色土
50．暗黄褐色土(粘質)
51．暗黄褐色砂
52．暗黄褐色土(粘質)
53．黒色砂質土＋暗黄褐色土ブロック
54．黒色砂質土
55．暗黄褐色土＋黒色砂質土
56．暗黄褐色砂　細石粒子含む
57．黒色砂質土
58．暗褐色土＋黒色土
59．暗灰色土＋黒色土(漸移的)
60．暗灰色(砂＋粘土)
61．灰色粘土＋暗灰色粘土(粘土主)
62．暗灰色(砂＋粘土)
63．暗青灰色砂
64．暗青灰色(砂＋粘土)



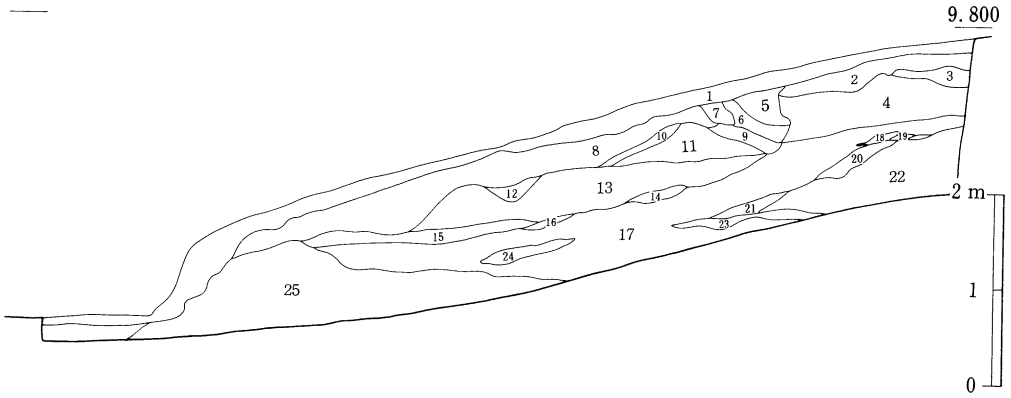
第49図　10号塚第２･第４トレンチ北壁実測図

1．表土(黒色砂質土)
2．黒色砂質土
3．暗黄褐色砂
4．黒色砂質土
5．暗黄褐色土
6．暗黄褐色砂
7．黒色砂質土＋暗黄褐色砂ブロック(中１cm前後)
8．黒色砂質土＋暗黄褐粘質土ブロック、処々斑状を呈する
9．黒色砂質土＋粘質土ブロック
10．暗黄褐色砂
11．黒色砂質土　炭　火粒を含む
12．暗黄褐色土　やや粘質(粒径は小さい)
13．黒色砂質土　暗褐に近い
14．暗黄褐色砂
15．暗黄褐色土
16．黒色土
17．暗黄褐色土＋黒色土
18．暗黄褐色土
19．暗黄褐色土＋黒褐色土
20．暗黄褐色土
21．暗褐色土
22．黒褐色土
23．暗黄褐色土
24．黒色土
25．黒褐色土
26．暗褐色土
27．黒色土
28．暗褐色土
29．暗褐色土
30．暗黄褐色土
31．黒色土
32．黒褐色土
33．暗灰褐色砂(粒径大)
34．黒色土
35．黒色土
36．暗灰色土
37．暗褐色土(粘性強い)
38．暗灰色砂



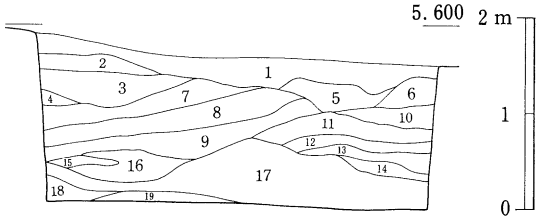
第50図　10号塚第３トレンチ西壁実測図

1．暗黄褐色砂(黒味やや強い)
2．暗黄褐色砂
3．暗黄褐色砂
4．黒褐色砂
5．暗黄褐
6．黒褐色砂
7．黒褐色砂
8．暗黄褐
9．黒褐色砂
10．暗褐色砂
11．暗黄褐色砂
12．暗黄褐色砂
13．黒褐色砂
14．黒褐色砂
15．黒褐色砂(黒味やや強い)
16．暗褐色砂
17．黒褐
18．暗褐
19．暗褐色砂
20．暗黄褐色砂
21．黒褐色砂
22．暗黄褐色砂
23．黒褐色砂
24．暗黄褐色砂
25．黒褐色砂
26．黒褐色砂
27．暗黄褐色砂
28．黒褐色砂



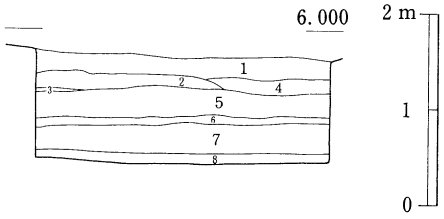
第51図　10号塚第７トレンチ北壁実測図

1．表土黒褐色砂
2．暗褐色砂(やや黄色味)
3．黒褐色砂
4．黒色砂
5．暗褐色砂(やや黄色味)
6．黒褐色砂
7．黒色砂
8．暗褐色砂
9．暗褐色砂(やや黄色味)
10．暗褐色砂(やや黄色味)
11．黒色砂
12．黒色砂＋暗黄褐色砂
13．暗黄褐色砂　細礫をわずかながら一様に含む
14．暗黄褐色砂(黒味やや強い)
15．暗黄褐色砂(細礫をわずかながら一様に含む)
16．暗黄褐色砂(黒味強い)
17．暗黄褐色砂
18．黒色砂＋暗黄褐色砂
19．暗黄褐色砂(やや粘質)
20．暗灰褐色砂(粒径やや大)
21．暗灰褐色砂(黒色砂を斑状に含む)
22．暗黄褐色砂(やや暗い)
23．暗黄褐色砂(粒径やや大)
24．暗黄褐色砂(粒径やや大)
25．黒色砂



第52図　10号塚第５トレンチ南壁実測図

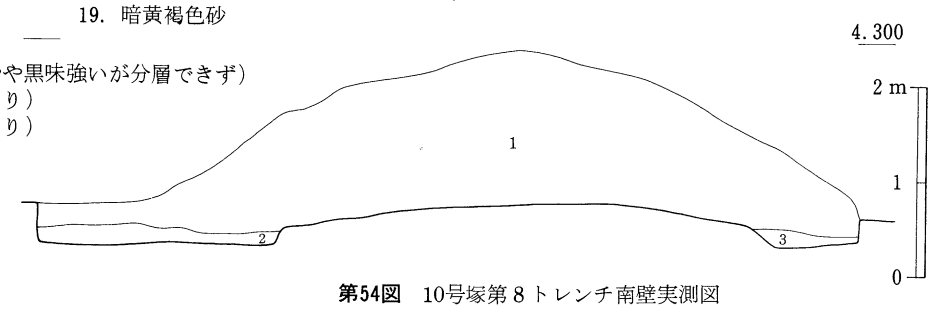
006　中央セクション
1．表土(黒色砂質土)
2．黒色砂質土
3．黒色土＋暗黄褐色土(砂質)
4．暗黄褐色砂
5．暗灰色砂(粒子細い)
6．黒色土＋暗黄褐色土
7．黒色土(炭化物含む)砂質
8．暗黄褐色砂
9．黒色土
10．暗黄褐色砂(黒味やや強い)
11．暗黄褐色砂
12．暗黄褐色砂(粒子粗、細石粒含む)
13．暗黄褐色砂
14．暗褐色土
15．暗黄褐色砂
16．暗黄褐色砂
17．暗黄褐色砂(黒味やや強い、粒子細い)
18．暗黄褐色砂(黒色土含む、粒子粗い)
19．暗黄褐色砂



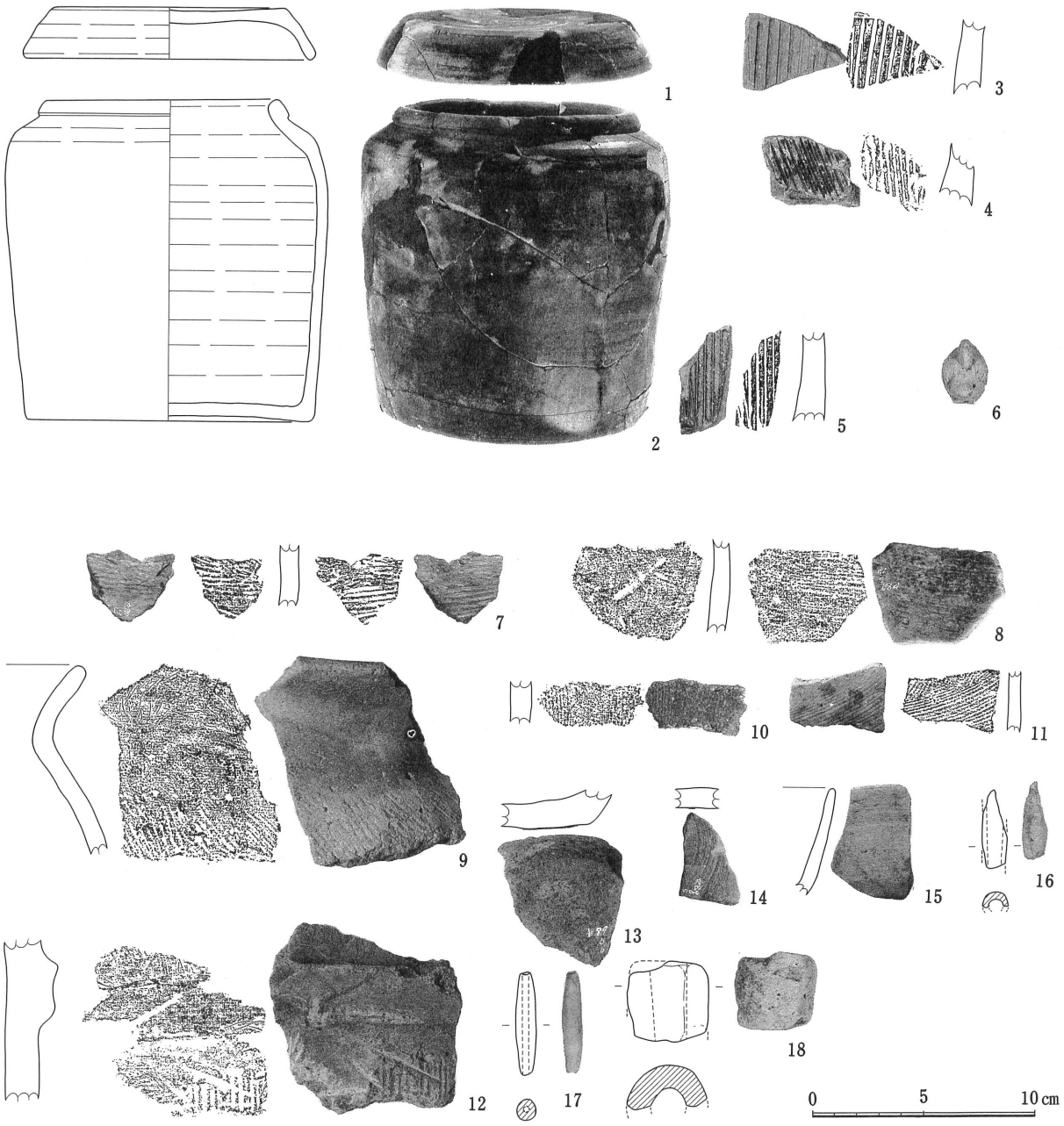
第53図　10号塚第６トレンチ南壁実測図

1．暗褐色土(やや黄色味)
2．黒色土
3．黒色土＋暗褐色土
4．暗褐色土
5．黒色土(やや砂質)
6．暗褐色土(漸移層)
7．暗褐色土(やや黄色味、粘質)
8．暗褐色砂

1．暗黄褐色砂(下層はやや黒味強いが分層できず)
2．暗青灰色砂(褐色斑あり)
3．暗青灰色砂(褐色斑あり)



第54図　10号塚第８トレンチ南壁実測図

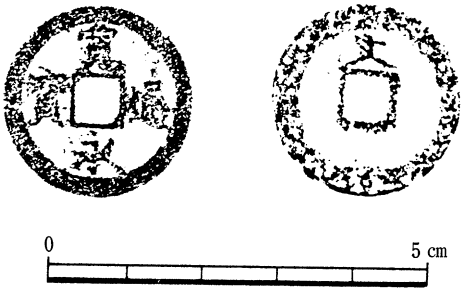


第55図　10号塚出土遺物

第11表　10号塚出土遺物観察表

No.	種類	器種	部位	法量・形態の特徴	技　法	胎　土	色調 外面	色調 断面	色調 内面	備　考
1	陶器	蔵滑器蓋		3.017.7天井径14.0天井部はやや凹内面は天井部から側部にかけてゆるやかな曲線を描く	内面は、全面ヨコナデ天井部外周はわずかに波状、外面はヨコナデののち「の」字状のミガキが一条	赤色微粒子をわずかに含む	暗灰 N 3/1	灰白 2.5Y 7/1	外面に同じ	
2	陶器	蔵骨器		19.0　14.0　17.1わずかに外方へ開く円筒状の胴部をもち、口縁は折り返し釉、底部は上方にやや凸	外面はヨコナデののちミガキ内面はヨコナデ底部は回転ヘラケズリか	赤褐色の粒子をわずかに含む	暗灰 N 3/1	灰白 2.5Y 7/1 灰＋暗灰＋灰のサンドイッチ状	灰 5Y 5/1	外面に針金の痕跡がある
3	陶器	すり鉢		口縁部は大きく外反すると思われる	内外面は共にヨコナデ無釉	砂粒小礫を多く含む	赤褐 10R 4/3	赤 10R 5/6	赤褐 10R 5/3	

4	陶器	すり鉢			内外面に褐釉条線10＋α	小礫をわずかに含む	暗赤褐 2.5YR 3/4	灰白 7.5YR 8/1	外面に同じ	
5	陶器	すり鉢			外面ヨコナデ褐釉内面無釉条線5＋α	小礫を含む	灰赤 7.5R 4/2	赤 10R 4/6	赤灰 7.5R 5/1	断面は三層のサンドイッチ状（黒＋赤＋黒）
6	不明土製品（動物？）			高7幅2.1耳鼻、頭と思われる表痕があるが、目口は認められない	手づくね内部に寧孔がある		表 橙 5YR 7/6	裏 にぶい橙 5YR 6/3		本来、別の器に付着していたものが剥落したもの
7	縄文				内外面とも横方向の条痕	繊維を含む	暗褐 7.5YR 3/4	黒 7.5YR 1.7/1	にぶい褐 7.5YR 5/4	
8	土師	カメ	胴		内面横方向のハケ	砂粒多く含む	にぶい褐 7.5YR 6/3	同左	にぶい褐 7.5YR 5/3	
9	土師	カメ		頸部は「く」の字状を呈し口縁は直線的に外方へ開く	外面、口縁部は横位のナデ胴部は斜方向のハケ、内面、口縁部は横位のナデ、胴部はナデ	砂粒小礫を含む	にぶい橙 7.5YR 6/4	同左	同左	
10	土師	カメ	胴		外面たて方向のハケ	砂粒を顕著に含む	にぶい橙 5YR 4/3	暗赤褐 2.5YR 3/6	暗赤褐 2.5YR 3/4	
11	土師	カメ	胴		内面横方向のケズリののちミガキ外面横方向のナデ	小礫を含む	にぶい橙 5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR	同左	
12	埴輪			タガは凹状	タテハケ	砂粒を含む	にぶい褐 7.5YR 6/3	同左	同左	
13	土師	カメ	底		体部は横方向のケズリ底部は不整方向のケズリ	砂粒を多く含む	にぶい赤褐 5YR 5/4	橙 2.5YR 6/6	にぶい橙 5YR 6/3	
14	土師	坏	底部		底部糸切り無調整	砂粒多い	にぶい橙 7.5YR 6/4	同左	同左	
15	土師	埦		口縁は直線的に外方に開く	内面は全面にヨコナデ、外面は体部はヨコナデ下方はヘラケズリ	精良	にぶい橙 5YR 7/3	同左	同左 部分的に淡赤橙色 2.5YR 7/4	
16	管状土錘						橙色 2.5YR 6/6	赤 10R 5/6	赤 10R 5/8	
17	管状土錘			全長4.7最大径0.9cm孔径0.3cm		精良	橙色 2.5YR 6/6 赤褐 10R 5/4			色調は所謂土師質土器に類似
18	管状土錘					赤色微粒子をわずかに含む	橙色 5YR 6/6	同左	同左	

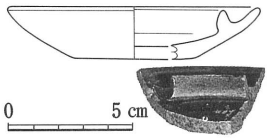


第56図　10号塚出土銭拓影図

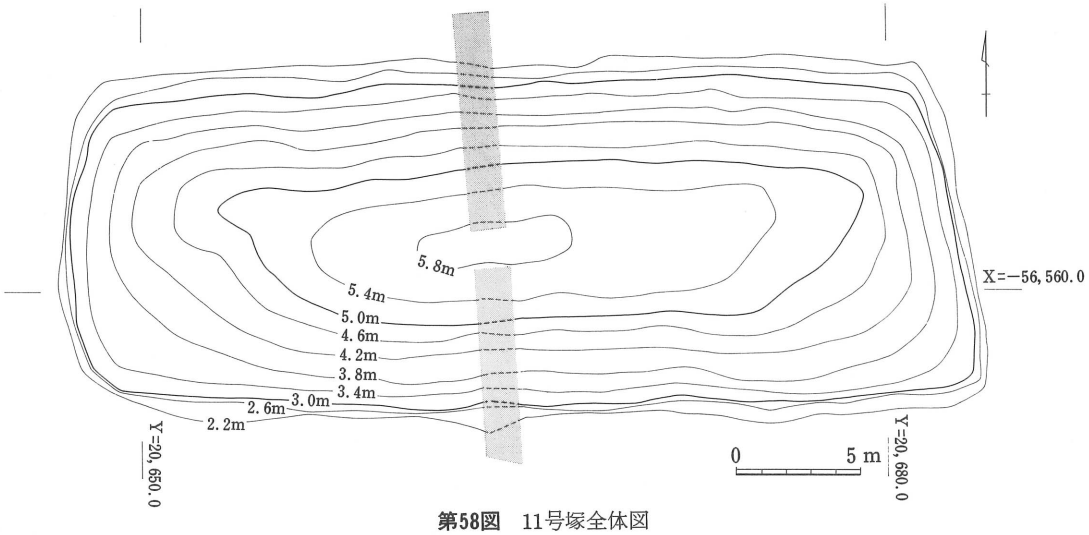
11）11号塚

今回の調査の中では、最も南に位置するものである。東西約30メートル、南北約10メートルのナマコ状を呈する。トレンチは、これを横断する形で設定した。

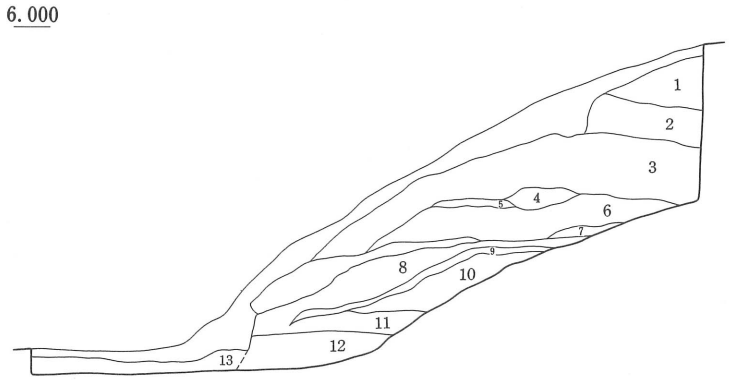
図示し得る遺物は、陶器の灯明皿一点のみである。



第57図　11号塚出土遺物

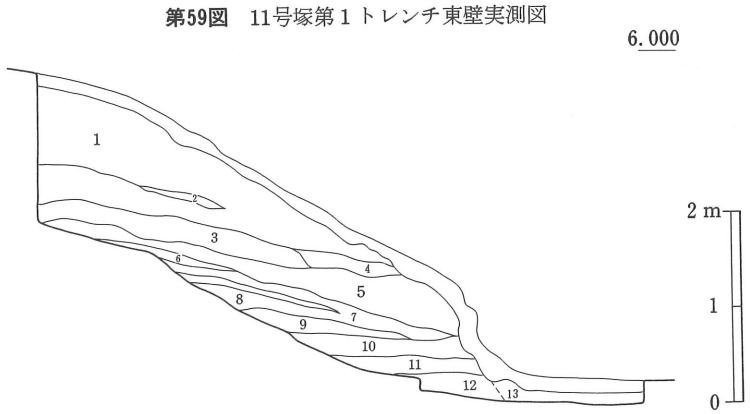


第58図　11号塚全体図



1．暗黄褐色砂
2．暗褐色砂
3．暗黄褐色砂
4．暗黄褐色砂(やや粘質)
5．暗黄褐色砂　黒色砂
6．暗黄褐色砂＋やや粘質
7．暗黄褐色砂＋黒色砂
8．黒色砂
9．暗黄褐色土(ローム質?)
10．暗灰色砂　黒味強い
11．黒色砂(炭化物含む)
12．暗褐色土(やや粘質)
13．暗灰色砂(やや粘質)

第59図　11号塚第１トレンチ東壁実測図



1．暗黄褐色砂
2．黒色砂＋暗黄褐色砂
3．黒色砂(黒味やや弱い)
4．暗褐色砂
5．暗黄褐色砂
6．黒色砂
7．暗黄褐色砂
8．黒色砂＋暗黄褐色砂
9．暗黄褐色砂(やや粘質)
10．黒色砂
11．暗黄褐色砂
12．暗灰色砂
13．暗青灰色砂＋粘土(貝がら含む)

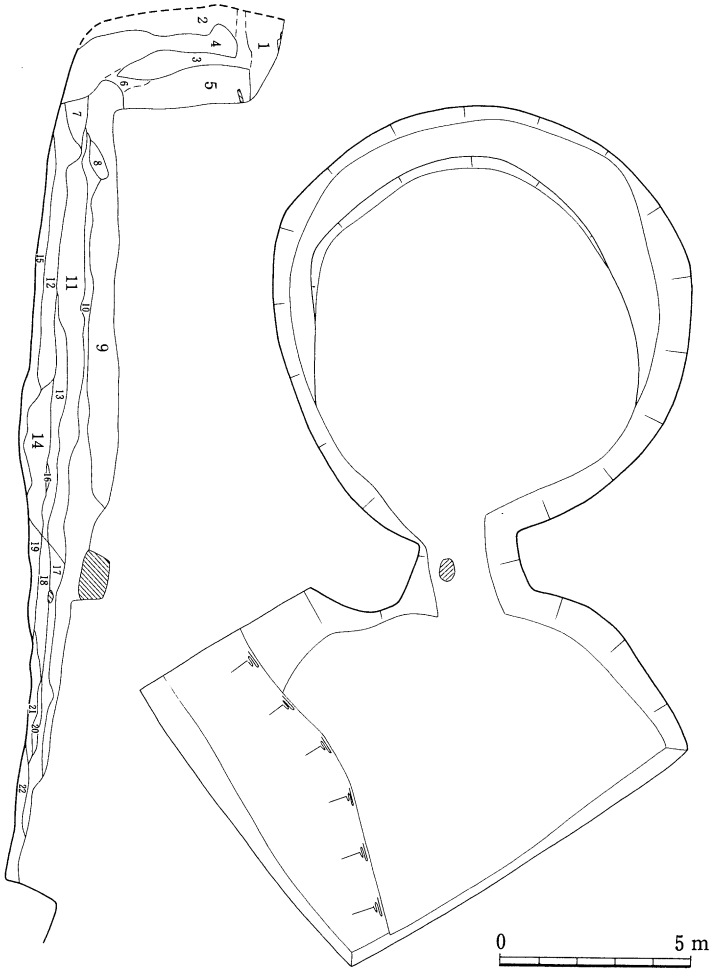
第60図　11号塚第２トレンチ東壁実測図

第12表　11号塚出土遺物観察表

No.	種類	器種	部位	法量・形態の特徴	技　法	胎　土	色調			備　考
							外面	断面	内面	
1	陶器	灯明皿		2.1(10.0)(4.8) 芯受け部は、口縁よりやや低い受け部に切り込みがある	内面全面にうすく褐釉施釉、外面は一部素地の露出する部分があるが、ほぼ全面に施釉	小さい気泡が見られる	地 灰黄色 2.5Y 7/2	灰黄色 2.5Y 7/2	明赤褐色 5YR 5/6	

12）12号炭窯

7号塚第一トレンチ南端において、暗赤褐色を呈する部分が確認された。炭窯の構築材の酸化したものと考えられたため、東側に拡張区を設定した。表層には、表土あるいはゴミの投棄があったが、それを除去した時点で焼土や炭化物の散布が確認され、炭窯と判断した。生産終了後に天井部が崩落したものと思われ、製品と思われる物の存在は認められず、焚き口の部分には閉塞のためと思われる石が置かれていた(断面図参照)。操業は最低2回行われた事がうかがわれた。掲載した平面図は操業開始時の平面で、焼成部は正円に近い形態をしている。最終時には、焼成部南半に石を積み、平面的にはイチジク状を呈するよう改変されていた。また、焼成部の最奥部には煙道が設けられており、煙道の天井部には、瓦が置かれていた。なお、この煙道の末端については、大木が残存していたため不



1．暗褐色土
2．暗褐色砂
3．暗褐色砂(煙土埋土)
4．黒灰色土(堅い)
5．黒灰色土(堅い)
6．煙道
7．黒灰色土　しまり良い
8．黒赤色土(構築材の落下)
9．暗赤褐色土(天井の崩落後の堆積土)
10．黒灰色土　しまりあり
11．暗赤褐色土
12．黒灰色土　しまり弱い
　暗黄褐色砂を斑状に含む
13．黒灰色土　しまり良い　黒褐色土
14．暗赤褐色砂
15．暗黄褐色砂(地山)
16．暗灰色砂
17．黒灰色砂(炭多く含む)
18．黒褐色土
19．暗褐色砂
20．赤褐色土
21．黒褐色土　しまりよい
22．暗黄褐色砂(地山)

第61図　12号炭窯実測図・断面図

明のままとなった。

構築材については、上に述べたような、石の使用の他に、やや粘性の強い土が使用されていた。地山を掘り込んでそのまま窯体とする場合もあるようだが、本例の場合は地山が砂であったため、他所より構築材を持ち込んだものとかんがえておきたい。

ま　と　め

冒頭にも触れたように、本遺跡を含め、海岸平野における歴史の動態については不明な点も多い。また、市内全域においては、中･近世の考古学的資料は希薄と言える状況にある。確かに市内には数多くの戦国期の城郭跡が、良好な遺存状況のまま存在しているが、実態不明な点が多いことも事実である。このような状況をふまえて、今回の調査の成果について、遺物を中心にまとめてとくこととする。

今回の調査では、遺構に伴うと考えられる遺物は概して少なく、ほとんどが各遺構の構成砂あるいは下層からの出土であった。したがって、いずれも二次堆積物と考えるべきものである。ただし、いわゆる「流れ込み」であるとは言え、全く無傾向というわけではない。縄文土器については条痕文系が目につくところであり、弥生土器については後期、土師器はハケメを持つ物が目立つ。報告に際しては、このような特徴的なものがどうしても抽出されやすいとは言え、このようなあり方は、流れこむ母体となる遺跡の姿をある程度反映したものと考えられる。ただし、この母体となる遺跡の位置を推定するのは難しい作業である。破片の磨耗の度合いから推定することもある程度可能かもしれない。しかし、それには標本とすべき実例、つまり、これだけの距離を移動すると、これだけ磨耗する、ということが明らかな物の存在が不可欠であり、また、磨耗の度合いを数量的に表現する方法も不明である今日においては、多分に直観的にならざるを得ない。器表が著しく磨耗しているものについては、移動の距離の長さの反映であり、逆の場合はその短さの反映であろう。今回出土した土器類については直観的とは言え、著しい磨耗とは言い難く、したがって、近隣に当該期の集落が存在したことを想起させるものである。たしかに、現在のような、地下水位の高さ、あるいは、かつての汀線までの近さを考えると、自然のおよぼす影響は、大であると考えざるを得ない。また、生産基盤の確保も難しいと考えがちである。だが、海水準の低下を考慮にいれるならば、現況における自然環境よりは相対的に良好であったかもしれない。ただし、その期間は短く、「海上潟」の中に埋没するような状況であったかもしれない。

奈良･平安期の遺物もわずかにみられるが、古墳時代の遺物に比べて少ない状況が認められる。近世の陶磁器が多数を占めるのは遺跡の性格からくるものと考えられるが、予想された以上に日常生活に供される遺物が多い。たとえば、すり鉢についても、多様な形態がある。無釉のもの、施釉されたものなど明らかに産地の相違を想起させる。また、磁器についても、いわゆる「広東碗」型や「蛸唐草文」など特徴的な遺物の存在が目につくところである。なお、磁器については肥前系、陶器について

は美濃・瀬戸系が大半を占めると考えておきたい。ただし、個別の報告においては、産地についての推定は保留してある。それは、各産地の製品との比較検討をふまえていないし、また、陶磁器を専門とする方々の鑑定をうけていないことによる。色調については、土色帳を使用したので今後の比較検討の材料にしうるのではないかと考えているところであり、また、共通認識がある程度可能になるのではないかと考えているところでもある。

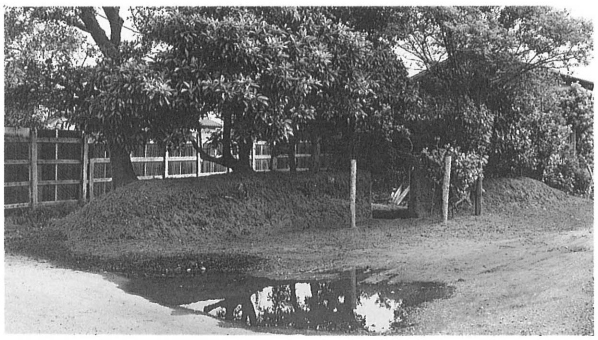
今回の調査で出土した、これら多様な陶磁器類の存在は、近世の複雑な流通過程の結果であり、その底流となる民衆の生活が基本である。しかし、今回はその肝心な部分については、不明のままとなってしまった。今後、同様の時期の遺跡の調査が行われる、見通しについては、不明であるが、いずれの日にか、今回の資料と対比しうる資料が明らかになることを期待したい。

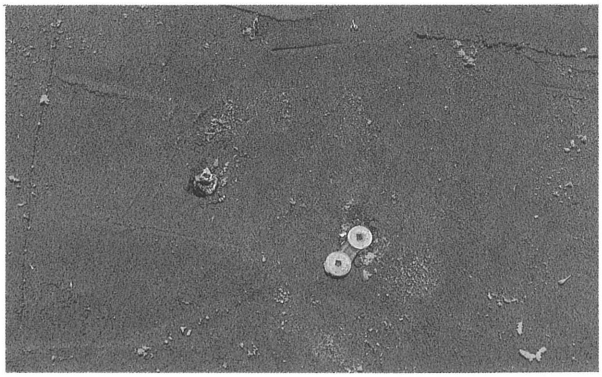
青柳塚群と周辺の地形

図版 2

1．1号塚全景	2．2号塚全景
3．2号塚出土貝ブロック検出状況	4．2号塚人骨･銭出土状況
5．3号塚全景	6．4号塚全景
7．5号塚全景	8．6号塚(左)･7号塚遠景
9．6号塚全景	10．7号塚全景

図版 2

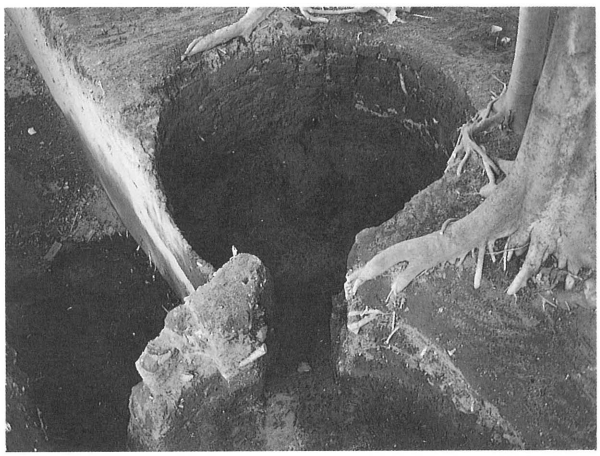




図版 3

1．9号塚全景(北西から)	2．9号塚全景(北から)
3．10号塚全景(9号塚から)	4．3号塚から見た9号塚(左)･10号塚
5．8号塚全景	6．11号塚全景
7．10号塚第2トレンチ南壁堆積状況	8．10号塚第4トレンチ東端部堆積状況
9．12号炭窯覆土除去状況	10．12号炭窯完掘状況

図版 3



——— 千葉県市原市 ———

青柳塚群

平成２年３月25日　印刷
平成２年３月30日　発行

編　集　財団法人　市原市文化財センター

発　行　市原市青柳土地区画整理組合
財団法人　市原市文化財センター
〒290-02　千葉県市原市馬立817番地
Tel. 0436(95)2755

印　刷　三陽工業株式会社
〒290　市原市五井5510－１番地
Tel. 0436(22)4348